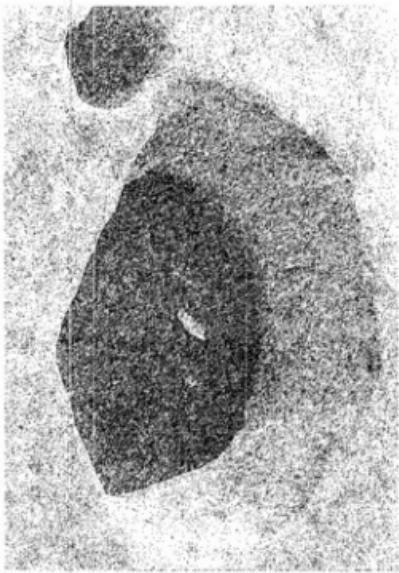


14号土塊 (東→)

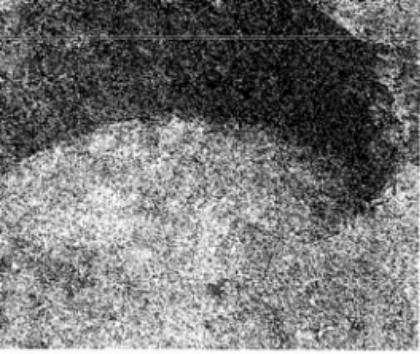


13号土塊 (北→)

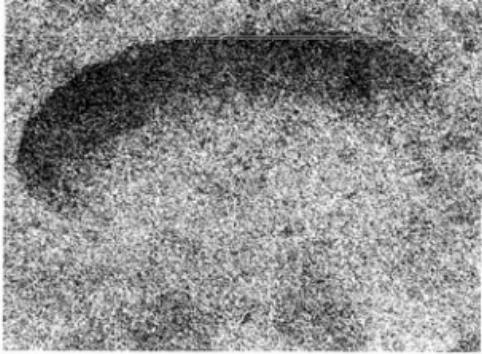


6号住居跡 (西→)

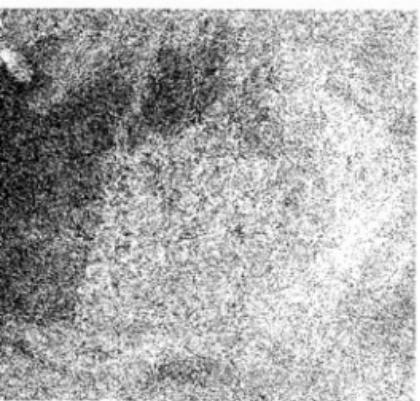




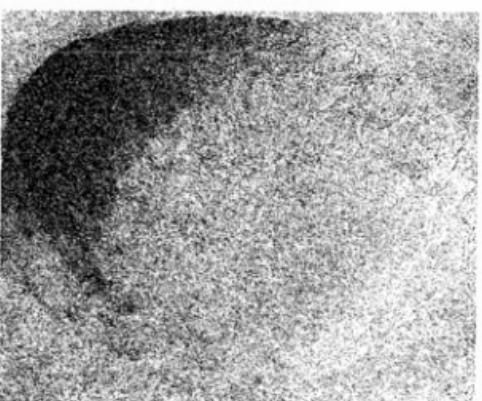
20号土塚墓 (西→)



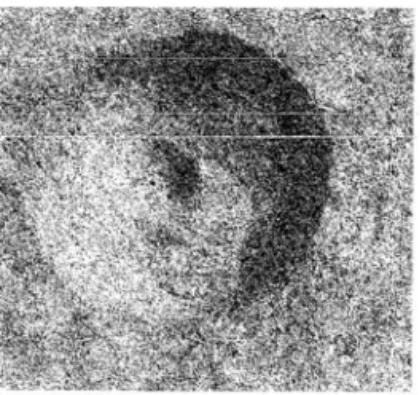
23号土塚墓 (北→)



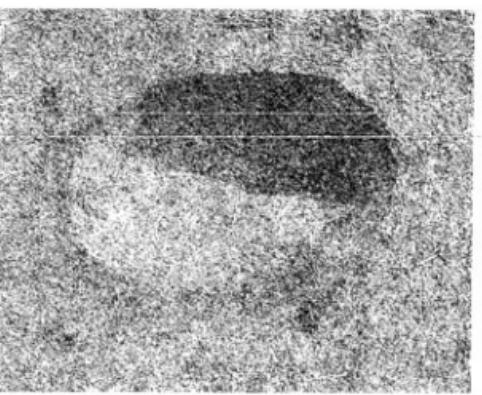
30号土塚 (東→)



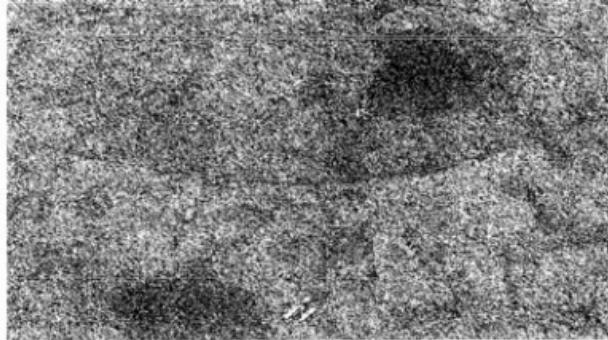
31号土塚 (東→)



37号土塚 (北→)



38号土塚 (北→)



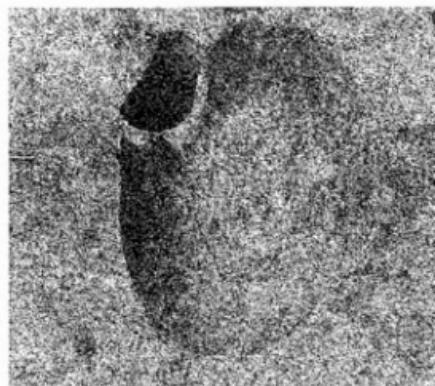
44号土坟墓 (南→)



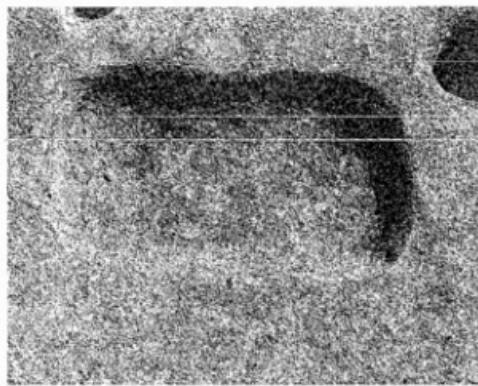
44号土坟墓 (西→)



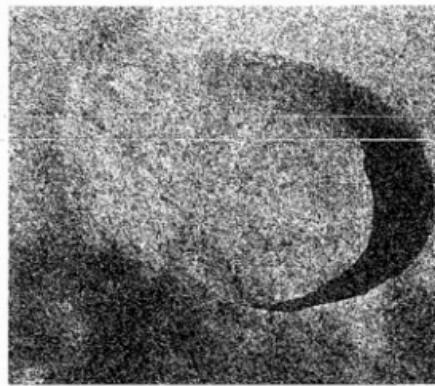
51号土坟墓 (東→)



52号土坟墓 (西→)



56号土坟墓 (北→)

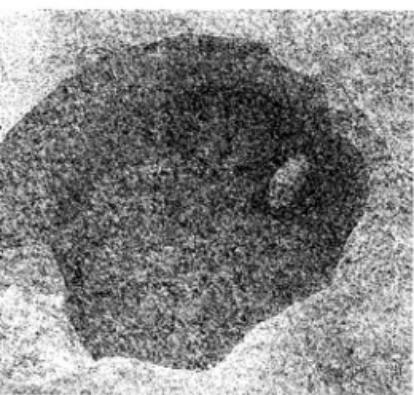


58号土坟墓 (東→)



61号土塚墓（東→）

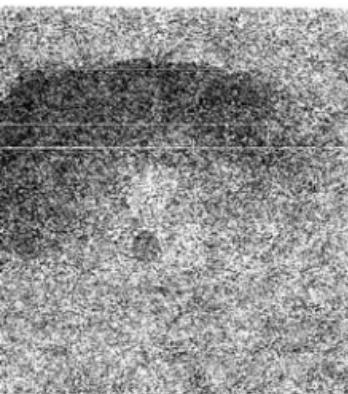
63号土塚墓（西→）



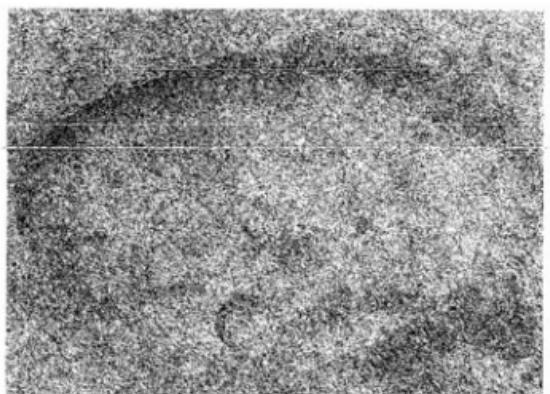
65号土塚（東→）



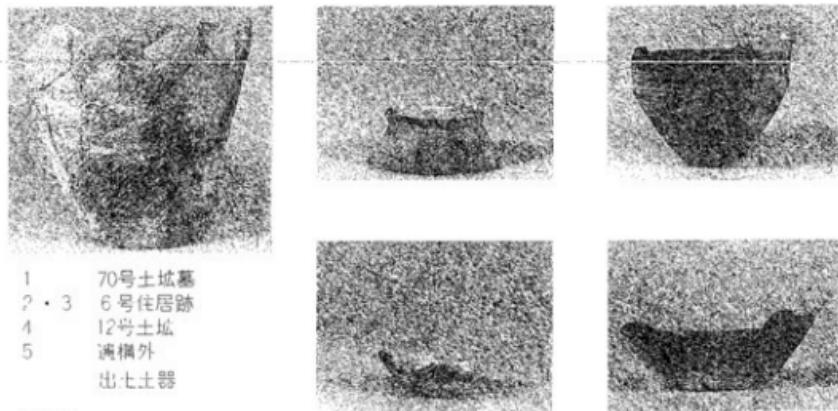
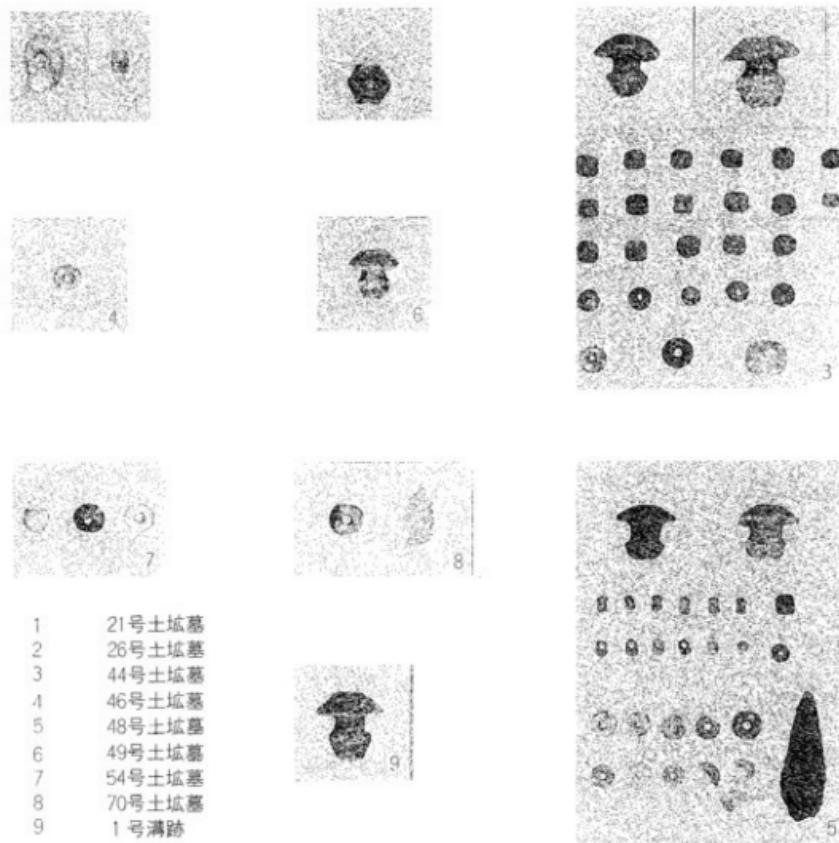
67号土塚墓（北→）



69号土塚（東→）

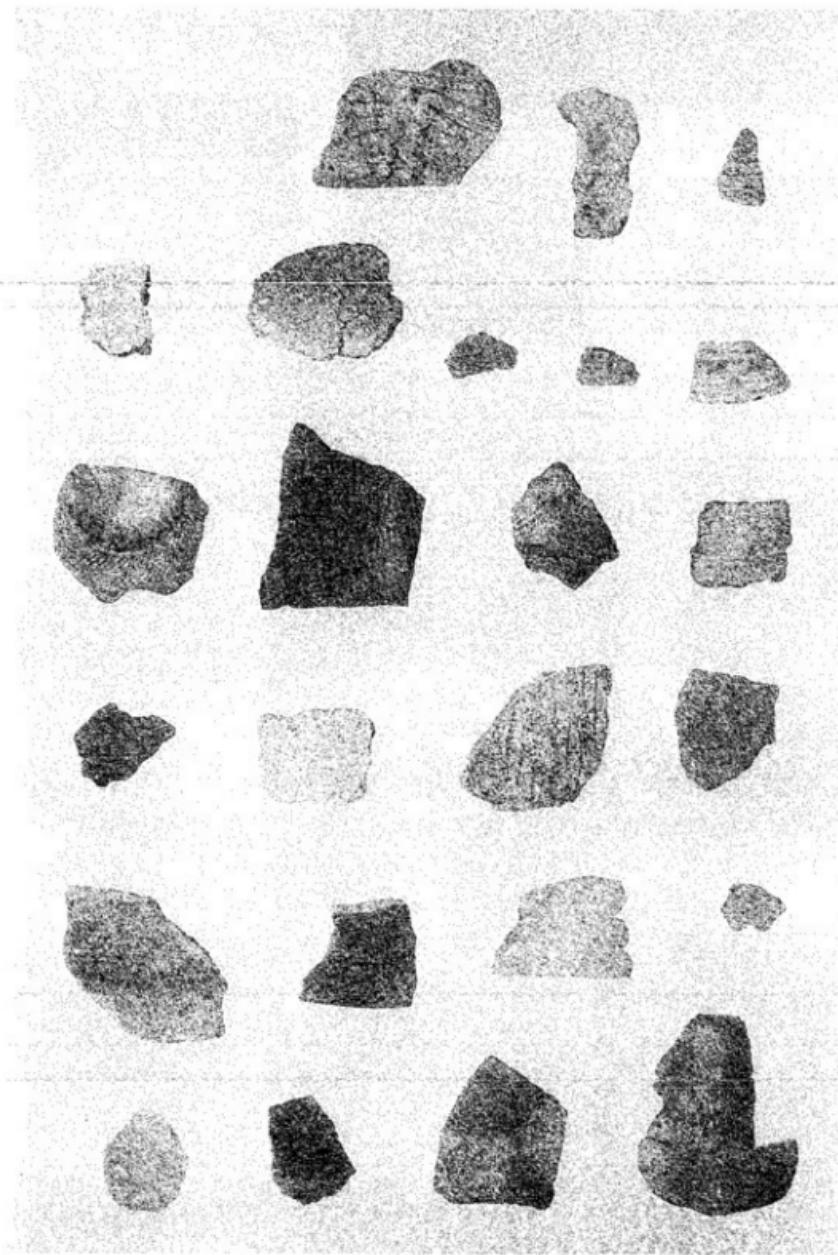


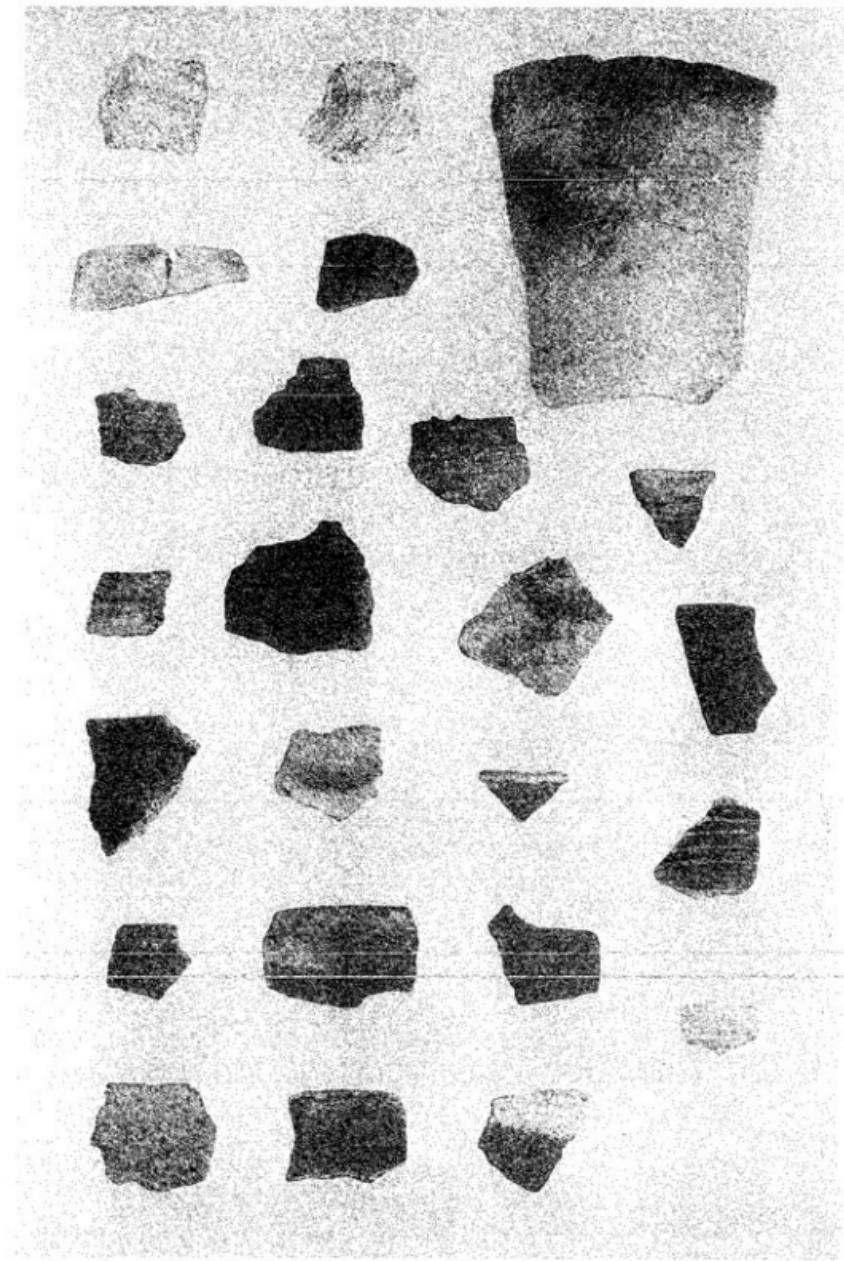
72号土塚（南東→）



图版9

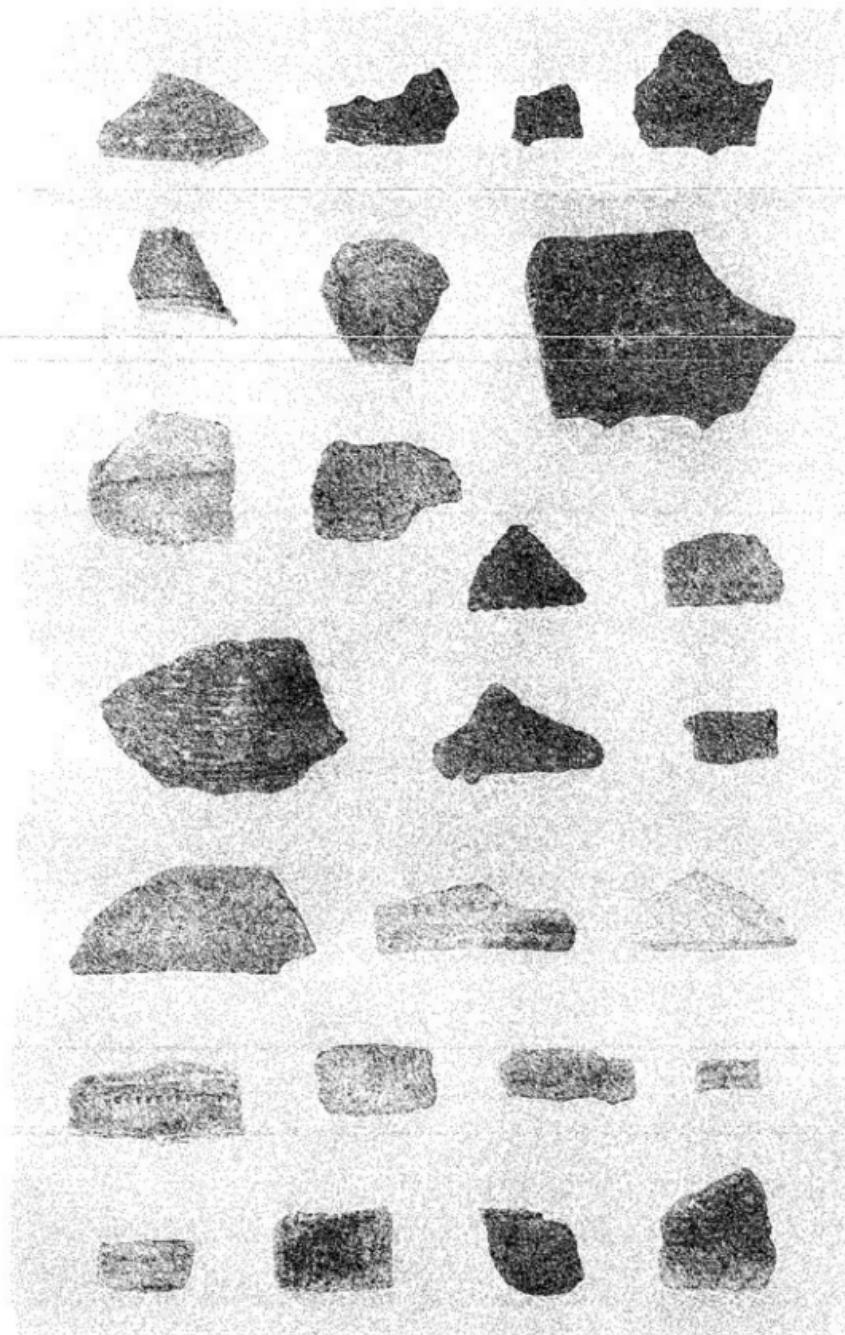
图版10 通城内出土土器

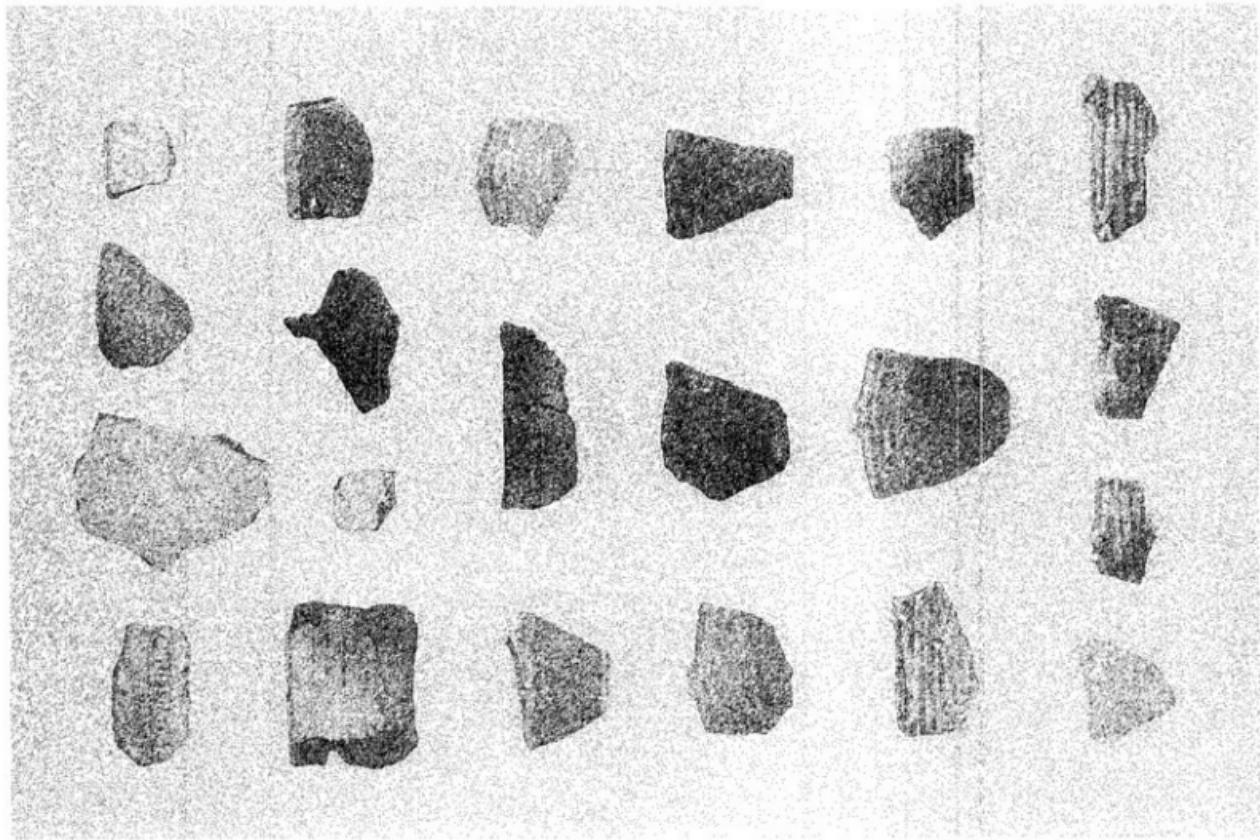




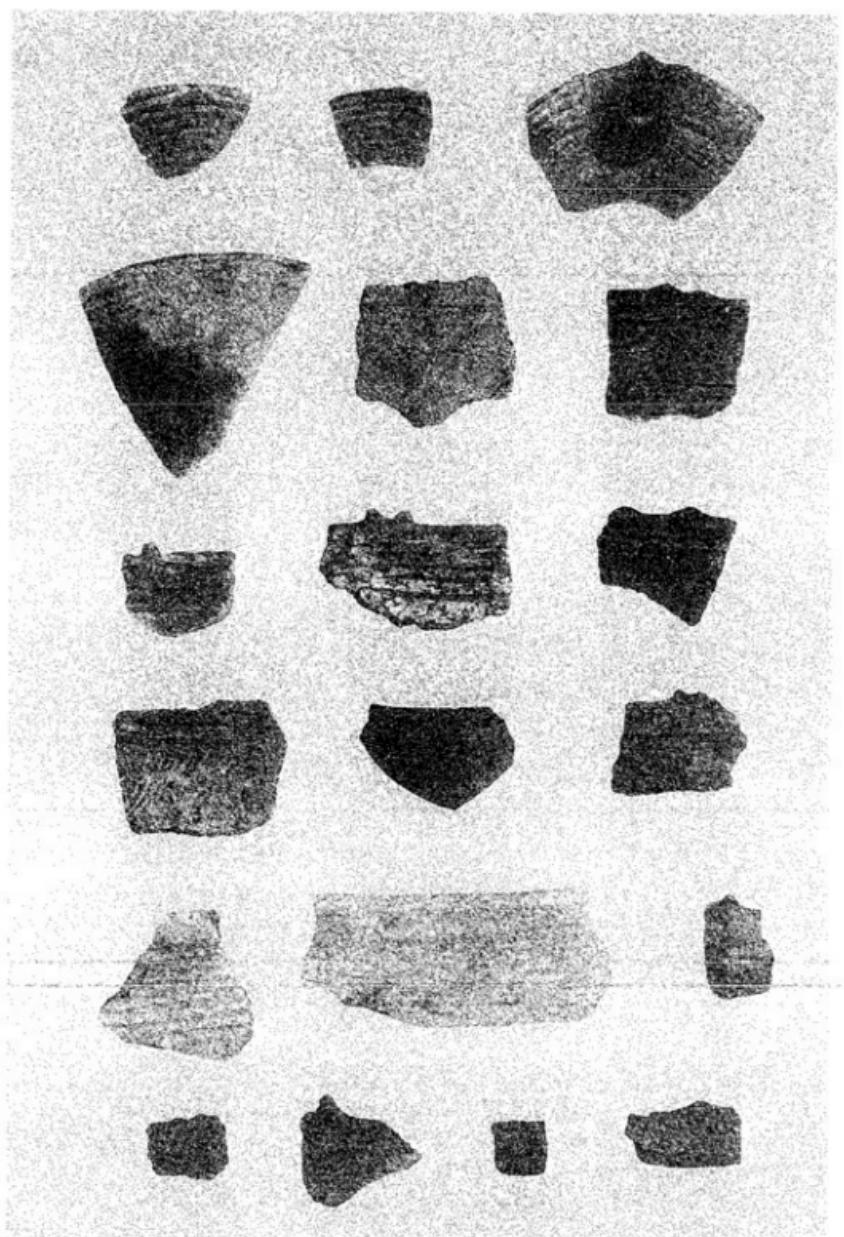
圖版11 遺構內出土土器

图版12 遗物内出土玉器

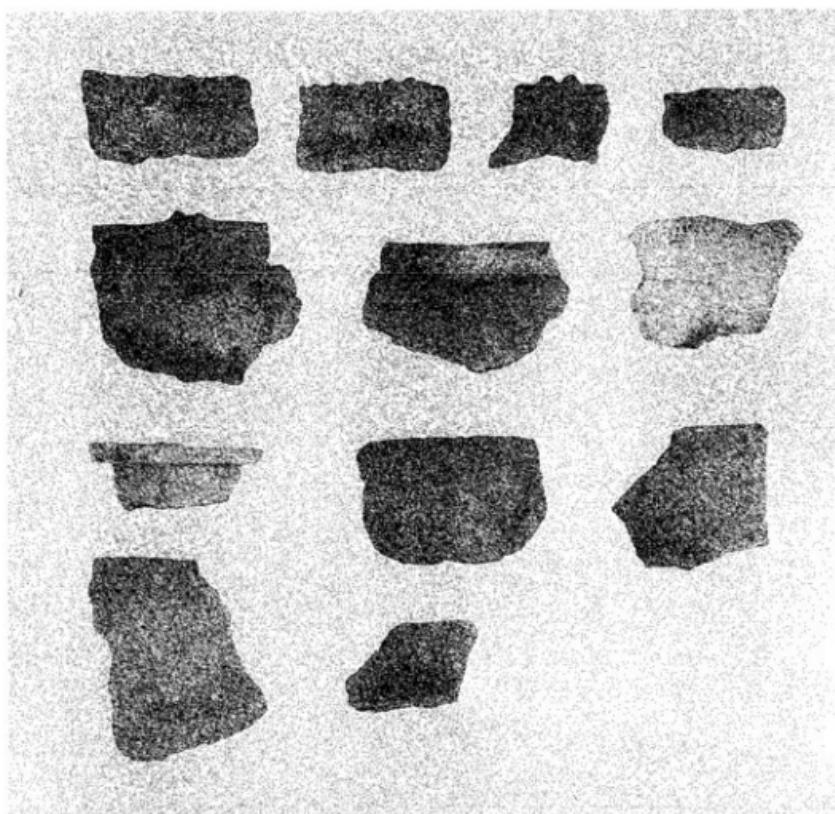




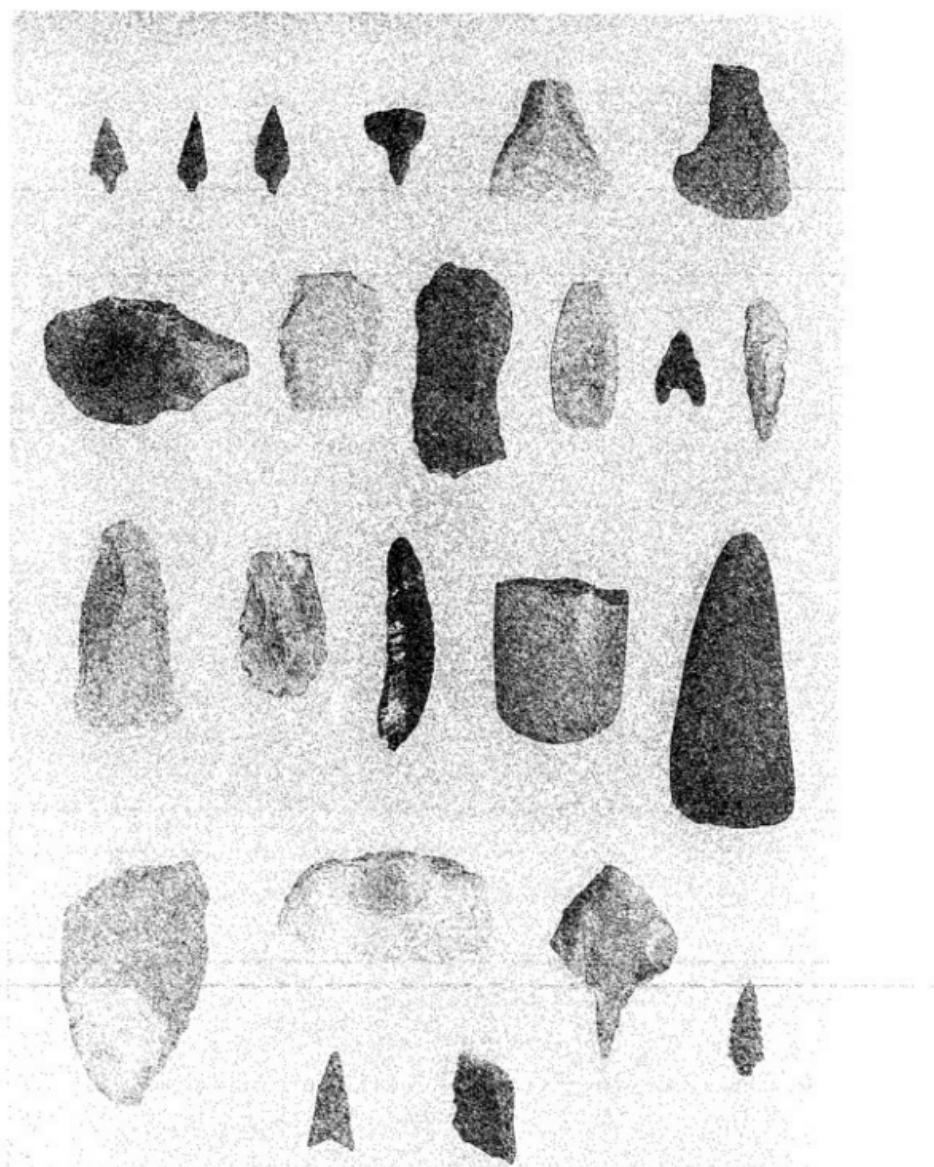
圖版13 遺構外出土器



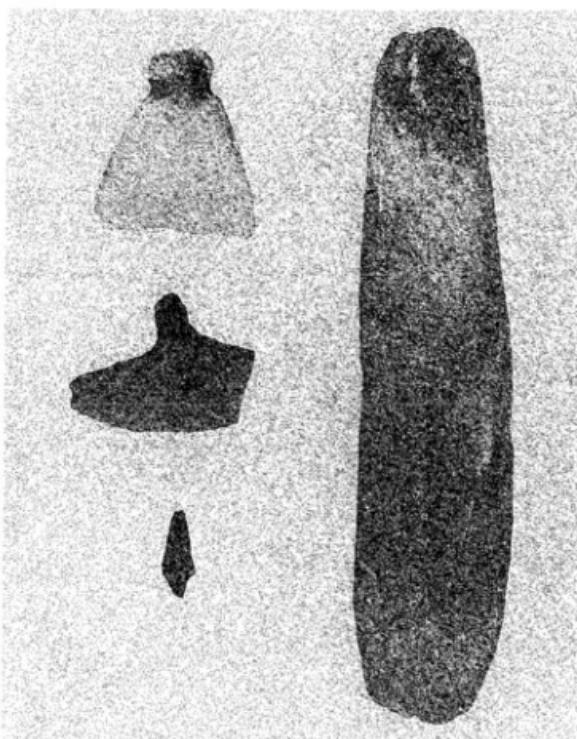
図版14 遺構外出土土器



図版15 遺構外出土土器



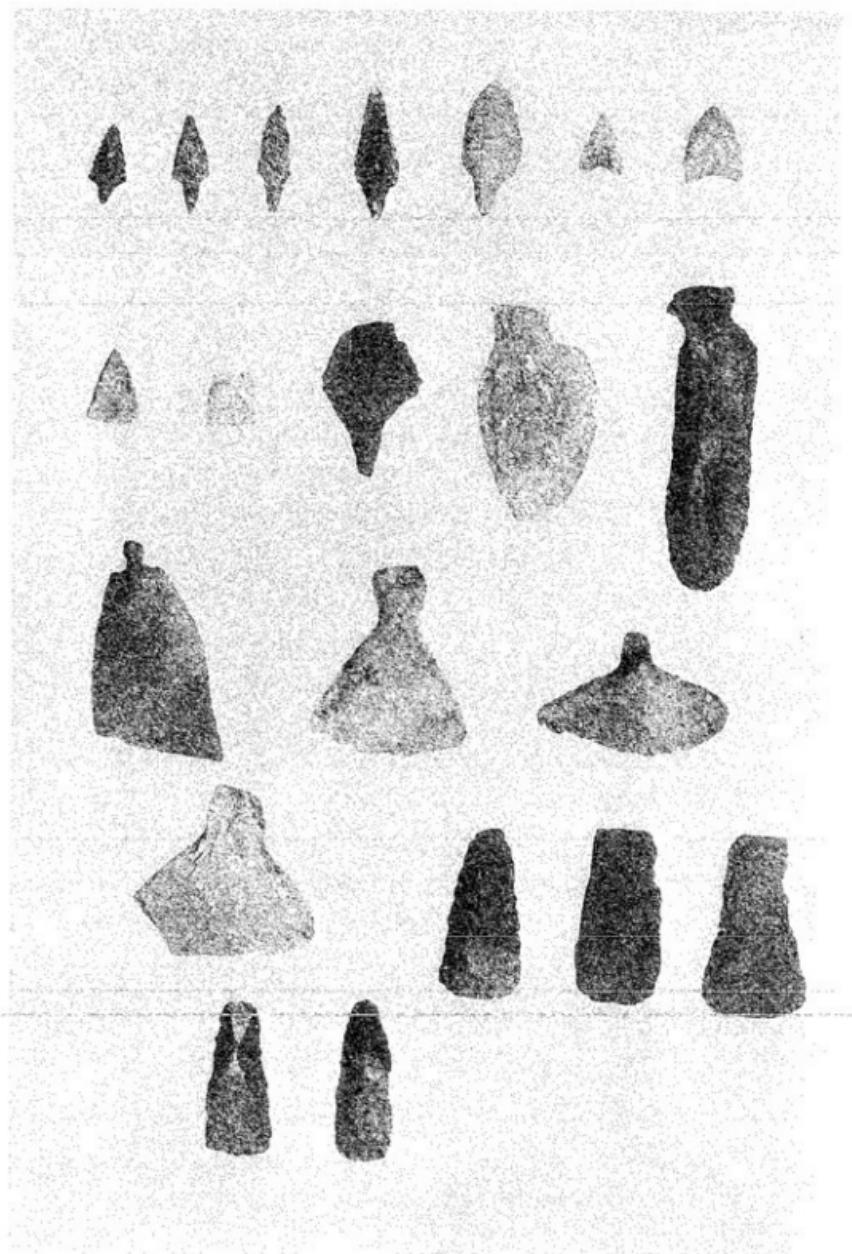
図版16 造構内出土石器



遺構内出土石器

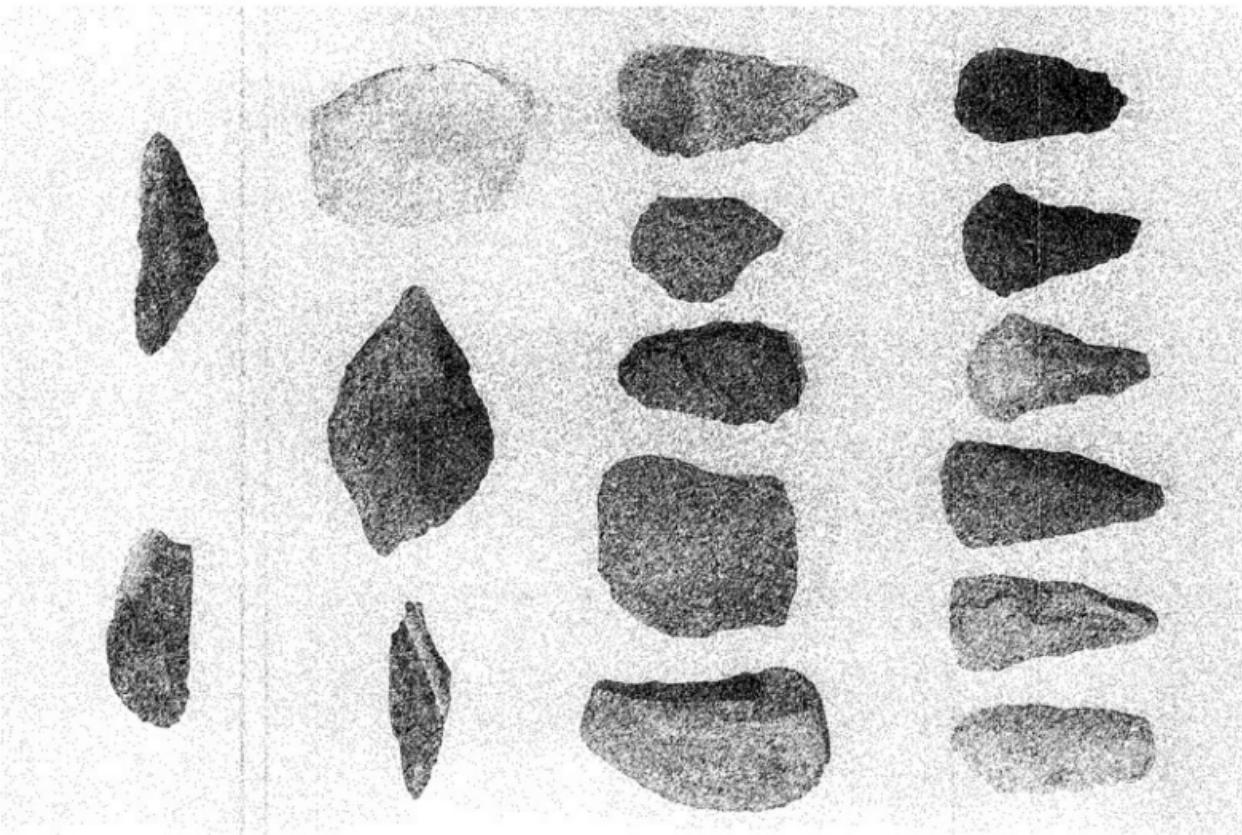


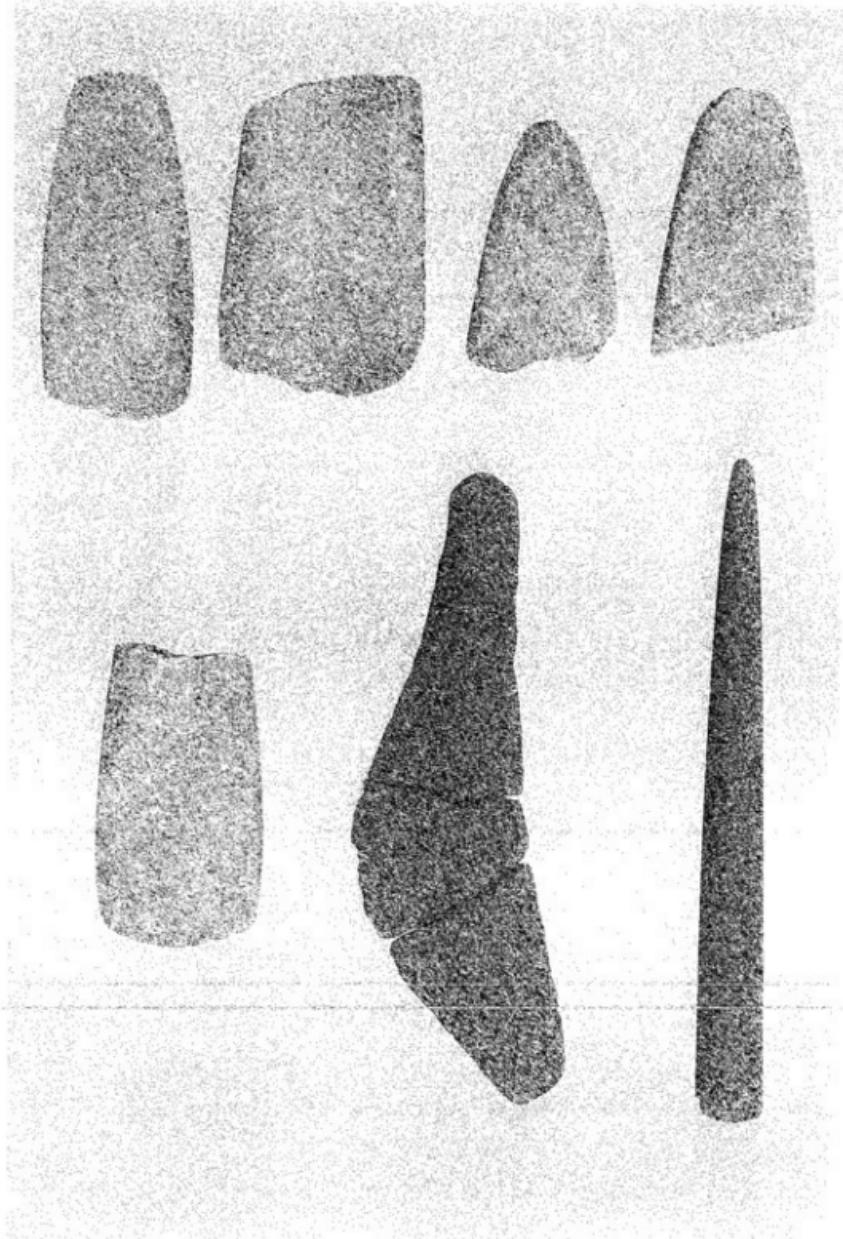
石製品



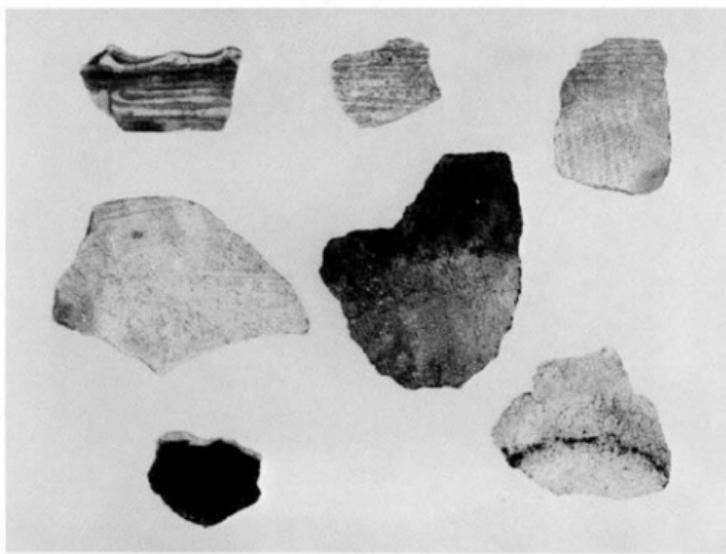
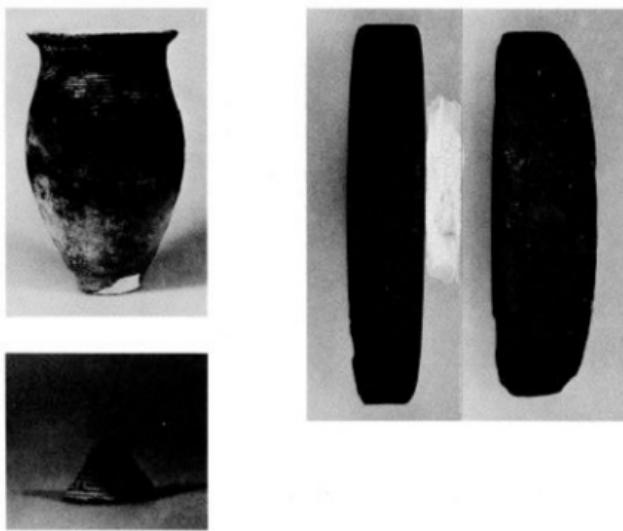
図版18 遺構外出土石器

図版19 遺構外出土石器



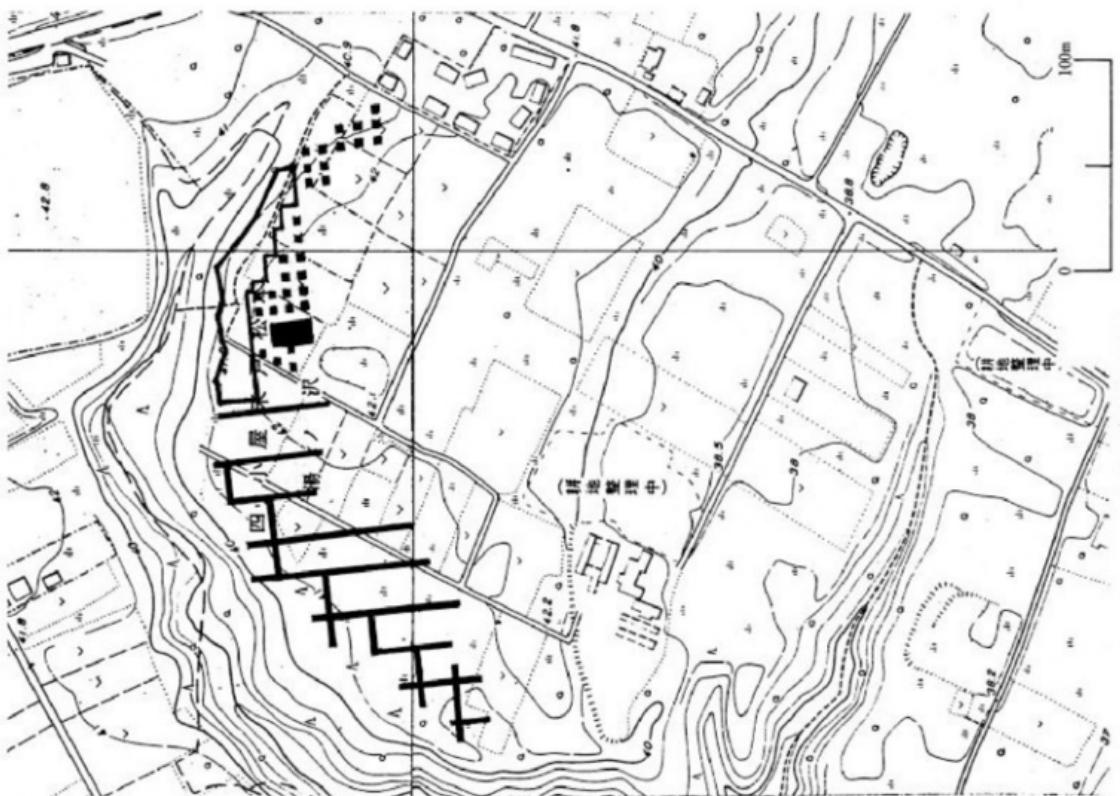


図版20 遺構外出土石器

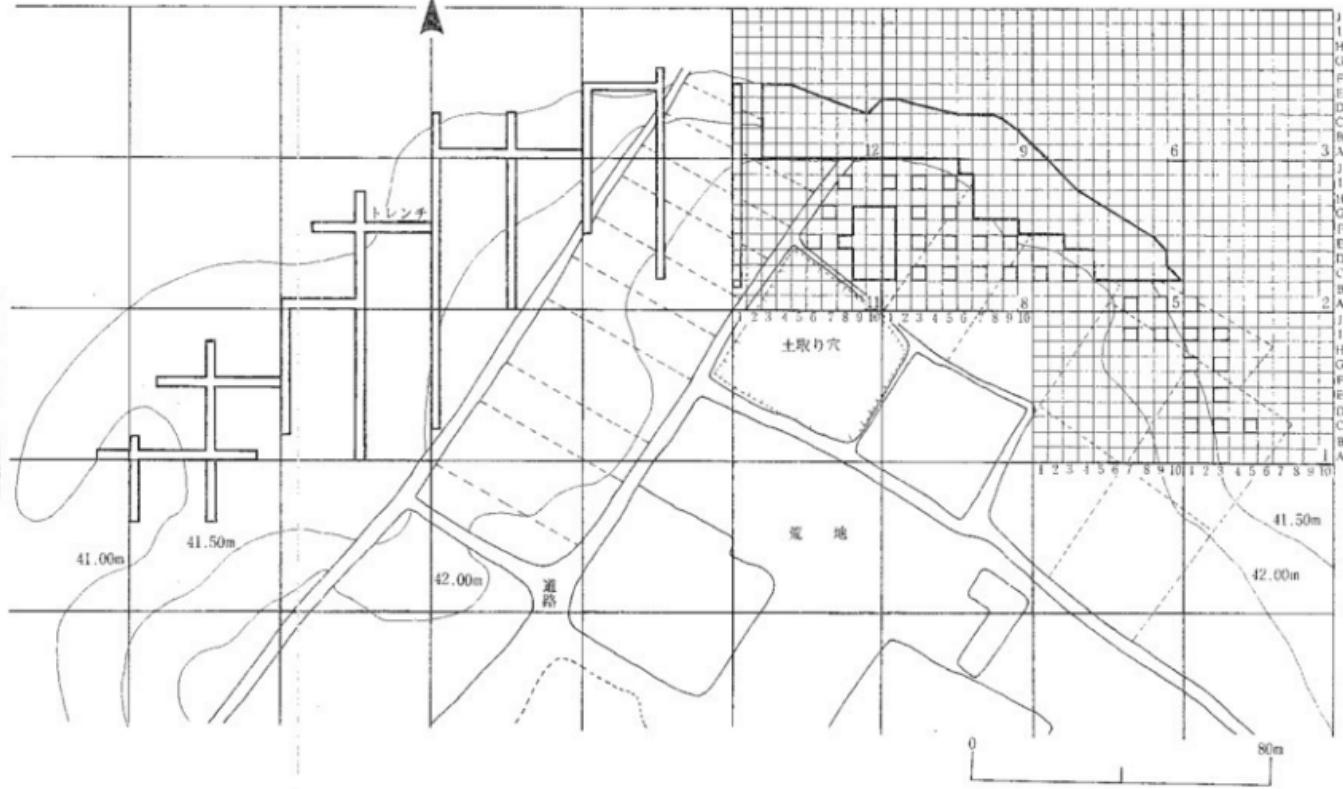


図版21 鈴木正夫氏所蔵遺物

湯ノ沢D遺跡



第1図 通路開拓の地形



第2図 グリッド配囲図

遺跡の概観

南から北東へ深く入り込んだ沢の突端部にある標高約40mの北西に広がる舌状台地上に位置する。遺跡は主に縄文時代中期後葉～末のもので、検出遺構は竪穴住居跡13軒、フラスコ状ビット1基、土壙12基などである。また時期の異なる炭焼窯跡1基が検出されている。縄文時代中期末の遺跡は沢を隔てた北西側100mに下堤E、西側に下堤G遺跡がある。

遺構と遺物

1号住居跡（第3図）

調査区中央部で検出された。

プランは長軸4.1m、短軸3.4mの梢円形を呈する。確認面からの深さは約10cmで、壁はゆるく立ち上がる。ビットは壁沿いに10~20cmの深さのものが13個検出されており、柱穴と考えられる。炉は中央東寄りに作られた石囲い炉である。爐の一部は抜き取られている。炉内部には若干焼土が認められる。床は平坦で、軟弱である。

出土遺物

土器（第21図13~15）

覆土から出土した小破片である。沈線で文様を描くものである。15は二次加熱で赤変している。

2号住居跡（第4図）

調査区中央部東側で検出された。北東・南西部は風削木痕で壊されている。

プランは径約4mの不整円形を呈する。確認面からの深さは約10cmで、壁は北側がゆるく、南側はほぼ垂直に立ち上がる。ビットは南に数個検出されているが、主柱穴は明確でない。炉は石囲い炉と掘り込みからなるもので、石囲い炉内は火熱により赤化している。掘り込みは北壁際まで延び内部にビットが2箇認められる。床面は平坦で、軟弱である。

出土遺物

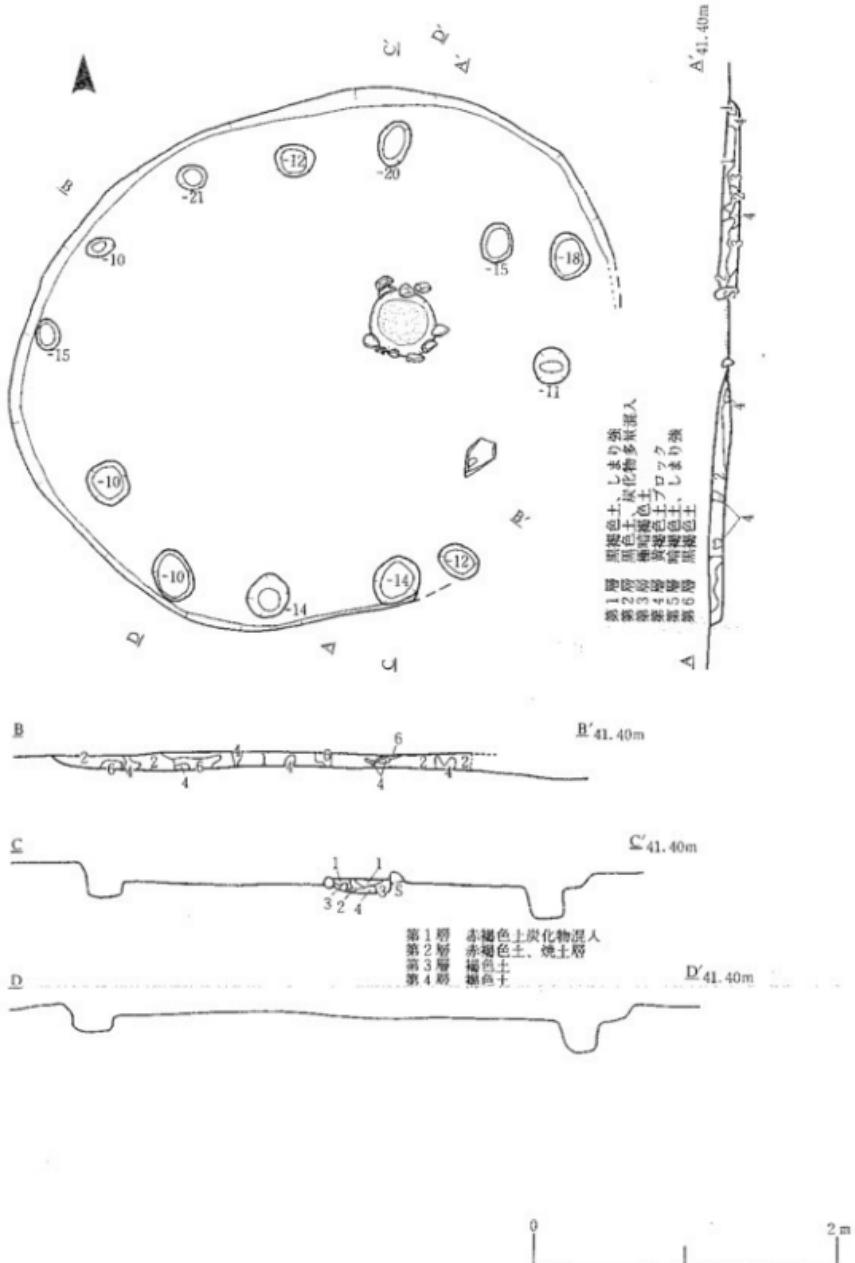
土器（第21図16~21）

覆土からの出土である。16・17は口縁部破片で、粘土紐による隆線で渦巻文を施している。18は地文の撚糸文に隆線を施し、19は条痕の地文に浅い沈線で文様を描く。20・21は縦に垂下する2条の隆線により豊臣文を施している。

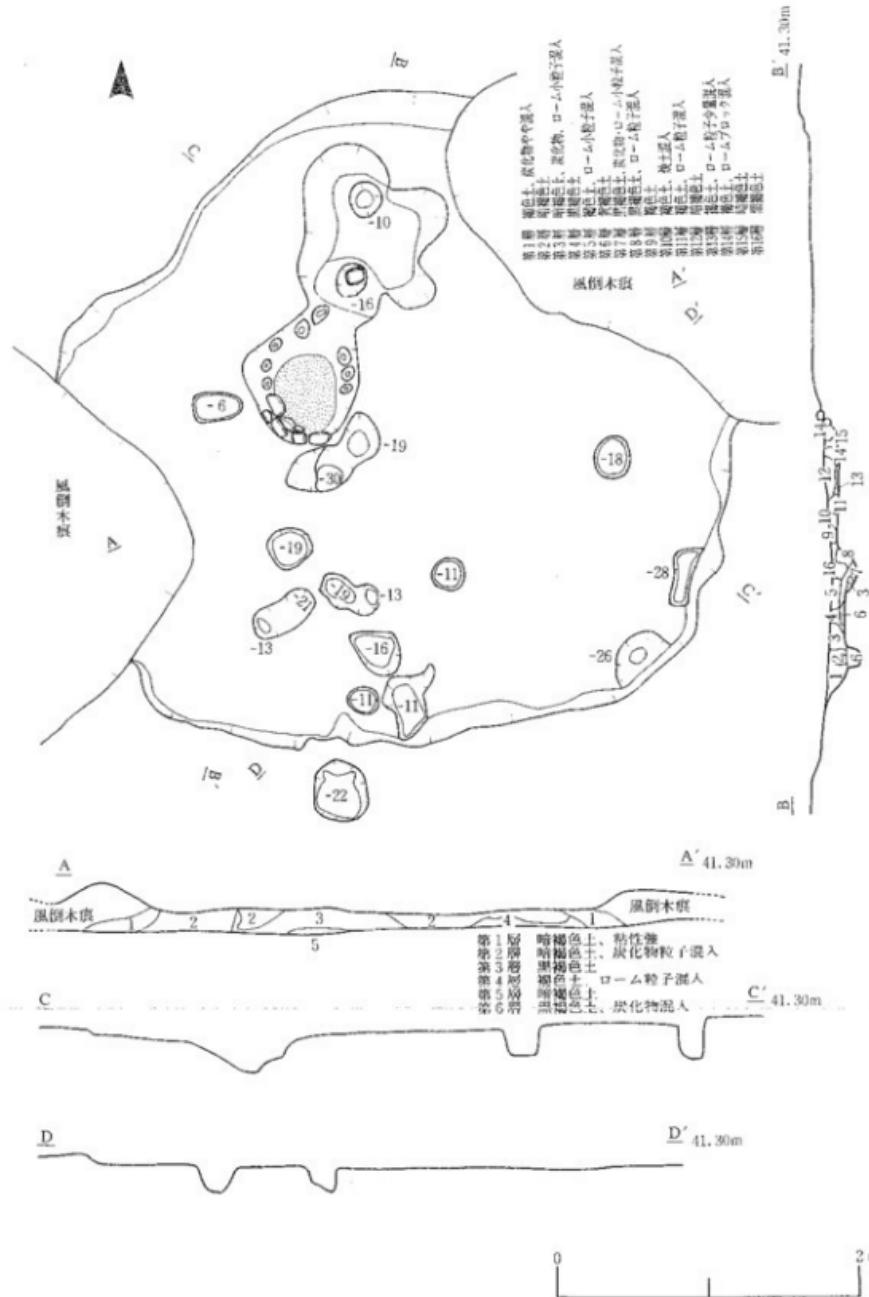
3号住居跡（第5図）

調査区東側で検出された。

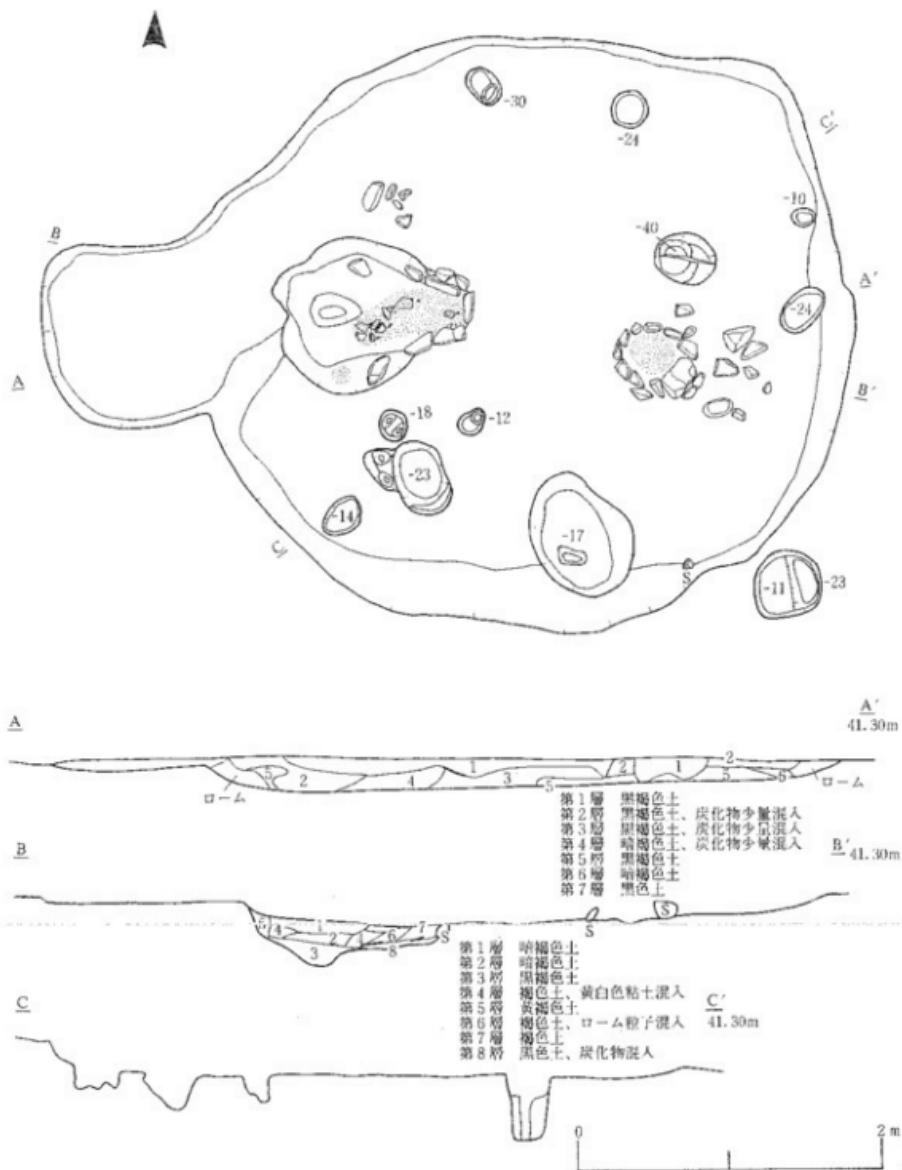
プランは径約4mのはぼ円形を呈する。西側に約1.2m程の深い張り出しが付く。確認面からの深さは約20cmで、壁はゆるく立ち上がる。ビットは10個検出されているが、深さ40cmのビットが主柱穴のうちの1個としてとらえられるが、他は不明である。炉は新旧2時期のものが検出された。新炉は東側に作られた石囲い炉である。旧炉は西側の一部貼り床下部から検出した石組部と掘り込みからなるものである。石組部内側は火熱をうけ赤化している。床面は平坦で、堅く良好である。



第3図 1号住居跡



第4図 2号住居跡



第5図 3号住居跡

出土遺物

土器（第21図22～32）

覆土から出土した22は口縁部破片で、口縁が内湾する深鉢形土器である。地文の繩文を磨消し、沈線で横円文を区画している。24は沈線によって曲線的な文様を描く。25～29は沈線によって懸垂文をつくる。25は懸垂文の両脇に綫に長い横円文を施している。30～31は同一破片で細いヘラ状工具で葉脈状の文様を施している。

石器（第29図1・2）

覆土から出土した。1は無茎の石鏃で、表裏両面にアスファルトが付着している。2は小形の磨製石斧で、磨滅のため片刃状の刃部を構成している。

4号住居跡（第6図）

調査区東側で検出された。

プランは径3.7mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは約15cmで、壁はゆるく立ち上がる。ピットは浅いものが8～9個検出されているが、主柱穴は不明である。炉は北西部に開く石囲い部と掘り込みからなるものである。石囲い部内側は火熱をうけ赤化している。床面は平坦で堅く、良好である。

出土遺物

土器（第19図1、第21図33～36）

1は床面直上から出土した。4個の波頂部を持つ波状口縁の鉢形土器である。波頂部下と波頂部間から下方にのびる懸垂文で4単位に区画し、渦巻文を施す。地文はL Rの半節斜繩文である。33～36は覆土から出土した。33は沈線、34・35は隆線によって懸垂文を施してある。

石器（第29図3・4）

覆土から出土した。3は基部が欠損した槍先状石器である。4は両側縁部に刃部をもつ削器である。

5号住居跡（第7図）

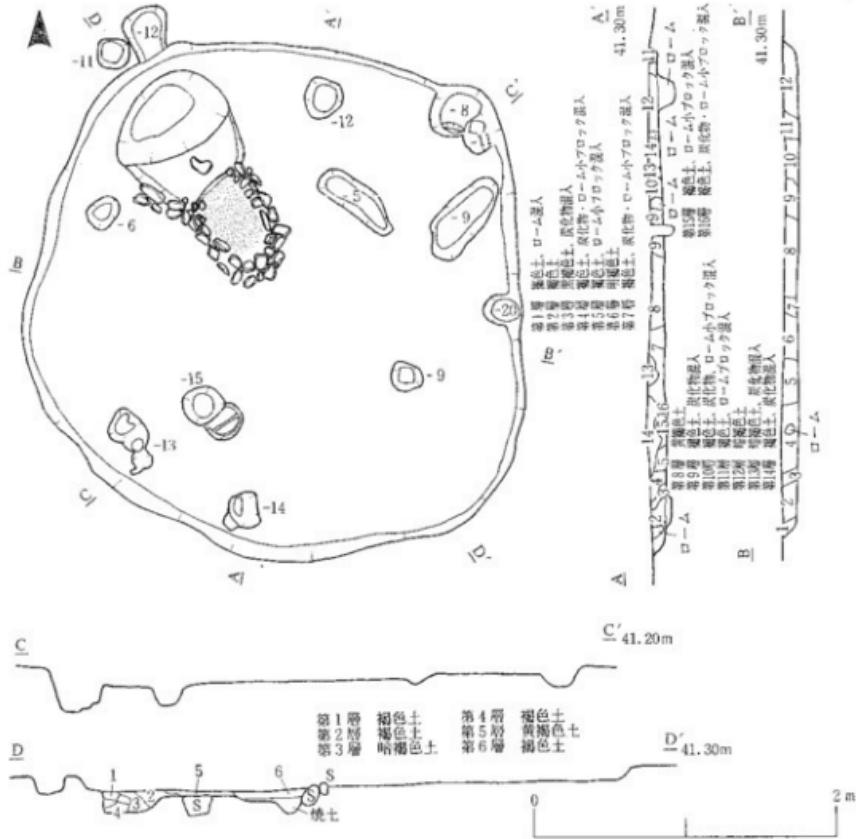
調査区東側で検出された。住居跡東壁の一部は炭焼窯によって切られている。

プランは径約3.0mの不整円形を呈する。確認面からの深さは約20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは深さ10cm以上のものが8個検出されているが、主柱穴は不明である。炉は石囲い部と掘り込みからなり、石囲い部内側は火熱をうけ赤化している。掘り込み内は非常に堅くしまっている。が南側は新しい掘り込みによって壊されている。床面は平坦で堅くしまり良好である。

出土遺物

土器（第19図2・3）

2・3とも床面直上から出土した。2は4つの波頂部を持つ波状口縁の深鉢形土器である。口縁部は無文帶である。口縁部下から浅い沈線によって直線的、あるいは曲線的に文様が展開され、渦



第6図 4号住居跡

巻文、懸垂文を施している。3は小形の鉢形土器で、沈縁によって、渦巻き文、懸垂文を施している。

6号住居跡（第8図）

調査区南側で検出された。

プランは径約4.5mの円形を呈する。確認面からの深さは約18cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは東側、および西側に多く検出されている。深さ20cmをこえ、壁に近いピット7個が主柱穴と考えられる。9は北側に作られており、3回の作り替えが行われている。古い順序に述べると、① 焼土と埋設土器の一部のみ残存するもの。② ①の北側を壊し、上器埋設部・石組部・掘り込みからなるもの。③ ②を埋めた後にその上部に作られた石窯い炉である。②の埋設土器は大部分壊されている。石組部内側は火熱を受けて赤化している。掘り込み内は非常に堅くしまっている。

床面は平坦で、非常に堅くしまり良好である。

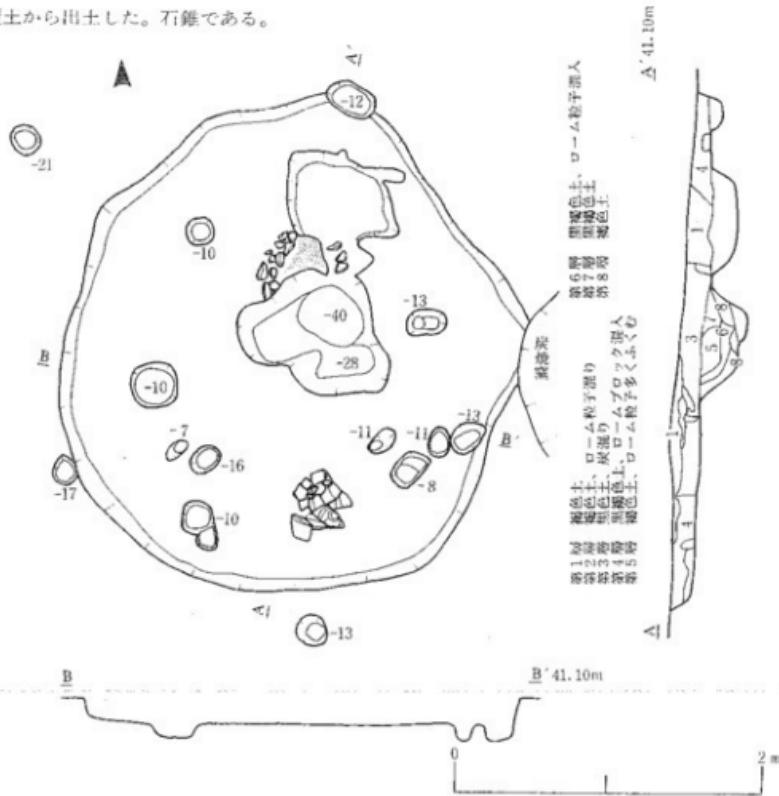
出土遺物

主器（第22图、37~45）

覆土から出土した。37~43は沈線で直線的、あるいは曲線的に区画した磨消し帯を有するものである。44は口縁部破片で捲糸圧痕の間に模似爪形文を施している。45は指により左方向に押圧を施している。

石器（第29圖5）

櫻土から出土した。石錐である。

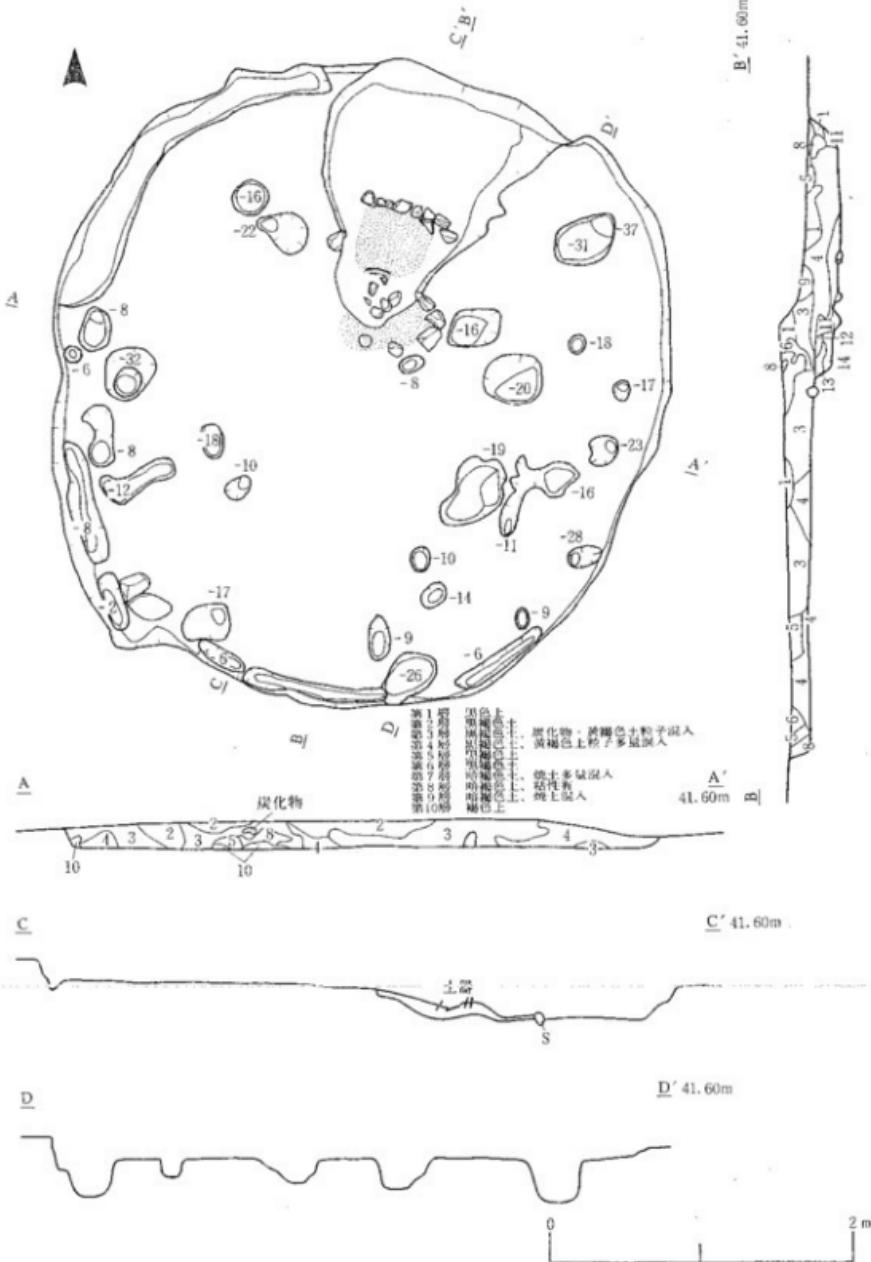


第7回 5号住居跡

7号住居跡（第9図）

調査区の南側で検出された。住居跡の中央やや南側は幅約1mの塗装によって切られている。

プランは長軸6.5m、短軸4.6mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは約25cmで、壁はゆるやかに立ち上がる。南東部には一部周溝が認められる。ピットは多数検出されている。壁に平行で



第8図 6号住居跡

対になるように並ぶ深さ50~74cmの、掘り方がしっかりした6個が主柱穴と考えられる。南側中央部に径約75cm、深さ57cmの大形ピットが検出されている。炉は中央やや南に作られているが、大部分は壇濠で切られており、埋設土器の一部と疎2個が残存するだけである。本来は石囲い土器埋設炉と考えられる。床面は平坦で、堅くしまり良好である。

出土遺物

土器（第19図4・5、第22図46~51）

4は炉埋設土器で深鉢形土器の破片である。細い粘土紐を貼付し、その間に撚糸圧痕文を施している。地文はL R（横回転）の単節斜縞文である。5は床面から出土した鉢形土器である。口縁、頸部に撚糸圧痕文をめぐらし、その間に細い粘土紐を波状に貼付し撚糸圧痕文、圧痕による高巻き文を施している。地文はL R（横回転）の単節斜縞文である。46~51は覆土から出土した。口縁部、頸部に撚糸圧痕文が主に施されるものである。

石器（第29図6・7）

覆土から出土した。6・7はヘラ状石器である。

8号住居跡（第10図）

調査区中央西側で検出された。

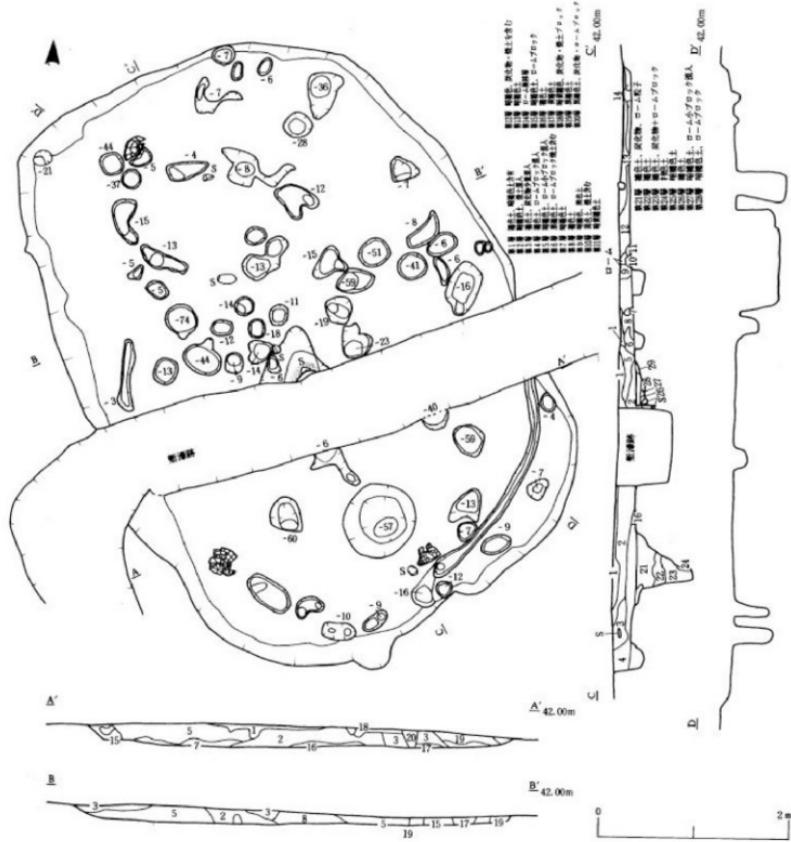
プランは径3.6mの円形を呈する。確認面からの深さは約45cmである。ピットは壁に沿って円形にまわり、30~54cmの深さのものが主柱穴と考えられる。東壁下に部分的に周溝が認められる。本住居跡では、炉に新旧4時期の作り替えが認められる。古い順序に述べると、① 東側に土器埋設部と掘り込みからなる炉、② 中央部に埋設土器の一部しか残存しない炉、③ ②を切って土器埋設部、石組部、掘り込み部からなる炉で、掘り込み部は北壁に接する。④ ②・③に貼り床を行った後、①の向い側（西側）に作った土器埋設部と掘り込みからなる炉、の4時期であるが、住居跡の拡張、縮少はみられないことから、同住居内で炉を移し変えたものであろう。4炉ともに上器埋設部周辺は火熱をうけ赤化している。①・④時期の炉では、疎の抜き取り痕とみられる小さな痕跡もあり、石囲い部の存在を思わせる。床面は平坦で、堅くしまり良好である。

出土遺物

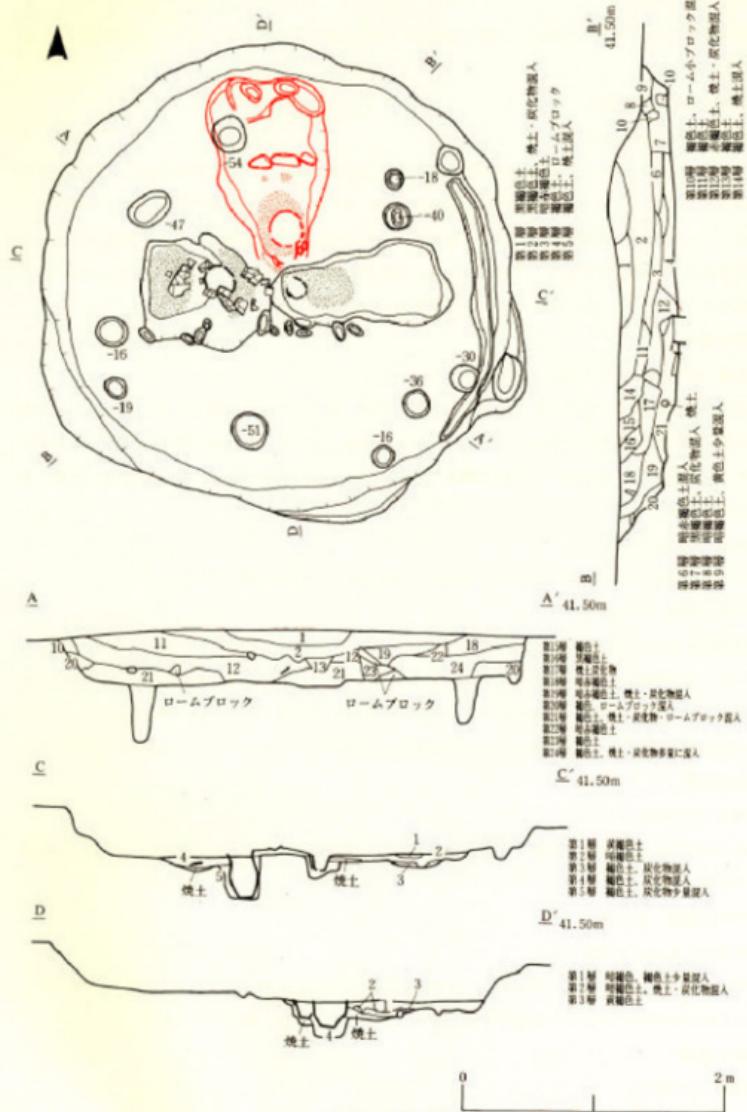
土器（第19図6・7、第20図8~11、第22図52~56）

6~9は炉埋設土器である。6・7・9・10は深鉢形土器である。いずれも沈線と磨消し手法で文様を展開させる。8は縦に細い沈線を垂下させている。沈線間は磨消し帯である。9は曲線的な沈線で「C」「U」字状に文様施して区画し、他は磨消しによる無文帯となる。10は沈線を垂下させ帯状に区画している。沈線間は磨消しによる無文帯である。11は覆土から出土した注口土器である。体部に沈線をめぐらし、口縁部は梢円文によって区画されている。52~56は覆土から出土した。沈線と磨消し手法によって文様が施されている。

石器・石製品（第29図8・9）



第9図 7号住居跡



第10図 8号住居跡

8は側縁部と先端部に片面加工を施した削器、9は2個の穴を両方から穿った有孔石製品で、石質は泥岩。

9号住居跡（第11図）

調査区西側で検出された。

プランは長軸4.65m、短軸3.6mの橢円形を呈する。確認面からの深さは約13cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは不規則に17個検出されているが、主柱穴は明確でない。炉は南側に作られている。石圓い土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。埋設土器周辺には焼が充積されている。埋設土器は深鉢形土器を正面して埋めている。周辺は火熱をうけ赤化している。掘り込み内の床は非常に堅くしまっている。床面は平坦で、若干軟弱である。

出土遺物

土器（第20図12、第22図57～59）

12は埋設土器で、胴部が膨らむ深鉢形土器である。細く垂下する沈線で4単位に区分し、区画内上部に橢円文、下部には細長い「臼」状の沈線文を配している。沈線間は磨消しによる無文帯である。地文はR L（巻回転）の半節斜纏文である。57～59は床面から出土した。曲線的な沈線と磨消し無文帯からなる。

石器（第29図10・15）

10は縱長剝片の両側縁部に刃部をもつ削器、15は立石で一端が欠損している。

10号住居跡（第12図）

調査区南側、7号住居跡の北で検出された。

プランは径約5mの不整円形を呈する。確認面からの深さは約22cmで、壁はややゆるやかに立ち上がる。ピットは不規則に18個検出されているが、主柱穴は明確でない。炉は中央部に作られた径1m程の地床炉である。浅い掘り込み内に若干燒土が認められる程度である。床面は平坦である。

出土遺物

石器（第29図11～13）

11は基部が丸味をおびた石鏟である。12は小形の有肩尖頭器である。13は先端部に片面加工を施した搔器である。

11号住居跡（第13図）

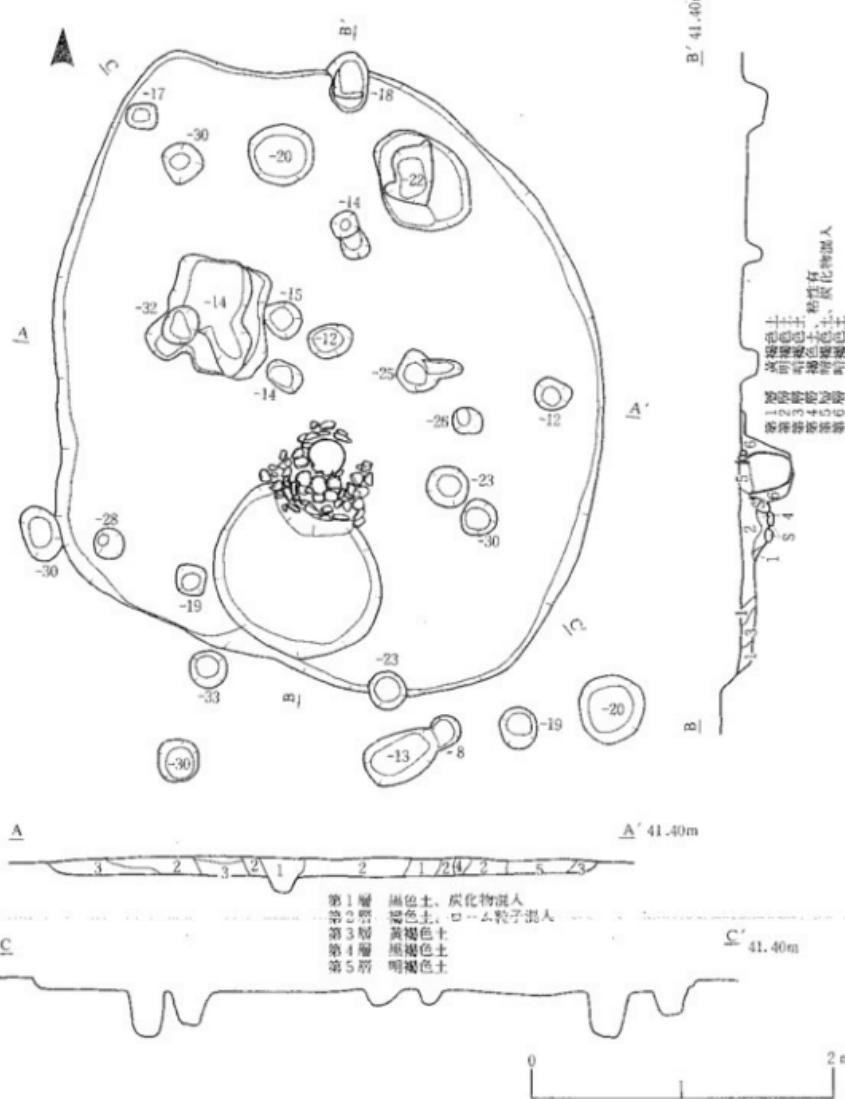
調査区の北東部で検出された。

壁は焼されて不明であり、炉とピットを検出した。ピットの位置などからプランを推定すると、径約4m前後の円形を呈すると考えられる。炉は石圓いがて内部に燒土が少量認められた。

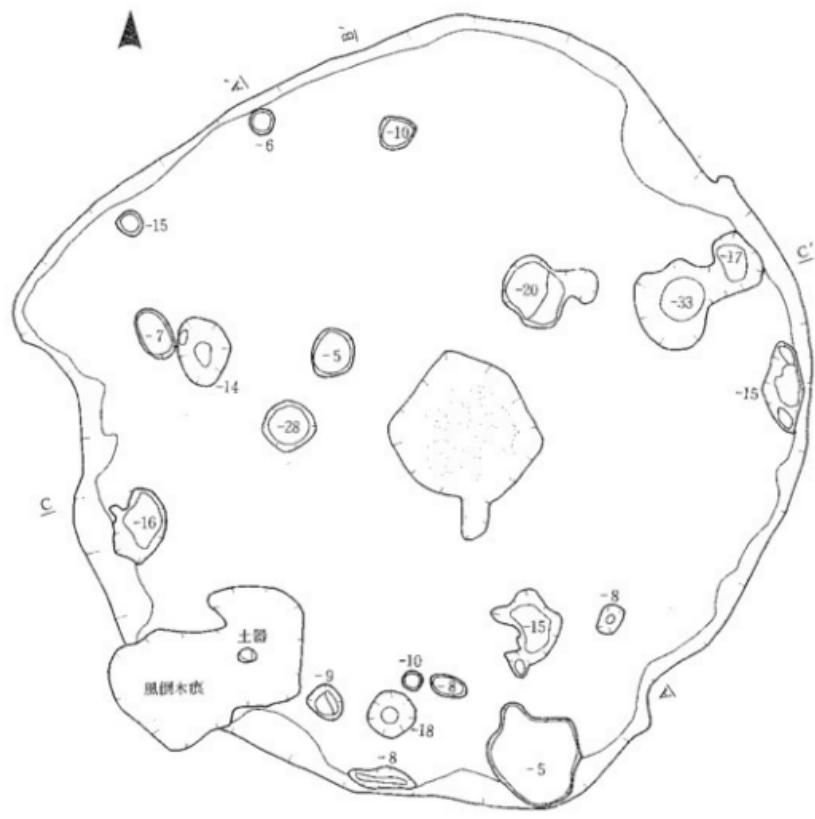
出土遺物

石器（第29図14）

14は無茎の石鏟である。石質は黒曜石。



第11図 9号住居跡



A △' 42.00m



B 42.00m

第1層	褐色土	第6層	黒褐色土、ローム粒子混入
第2層	褐色土、ローム粒子混入、粘性土	第7層	六角形土、ローム粒子多量に混入
第3層	褐色土、ローム粒子混入		
第4層	黒褐色土、ローム粒子混入		
第5層	褐色土、ローム粒子混入		

C △' 42.00m

第1層 黒褐色土
第2層 黒褐色土、燒土混入

第12図 10号住居跡



第13図 11号住居跡

12号住居跡（第14図）

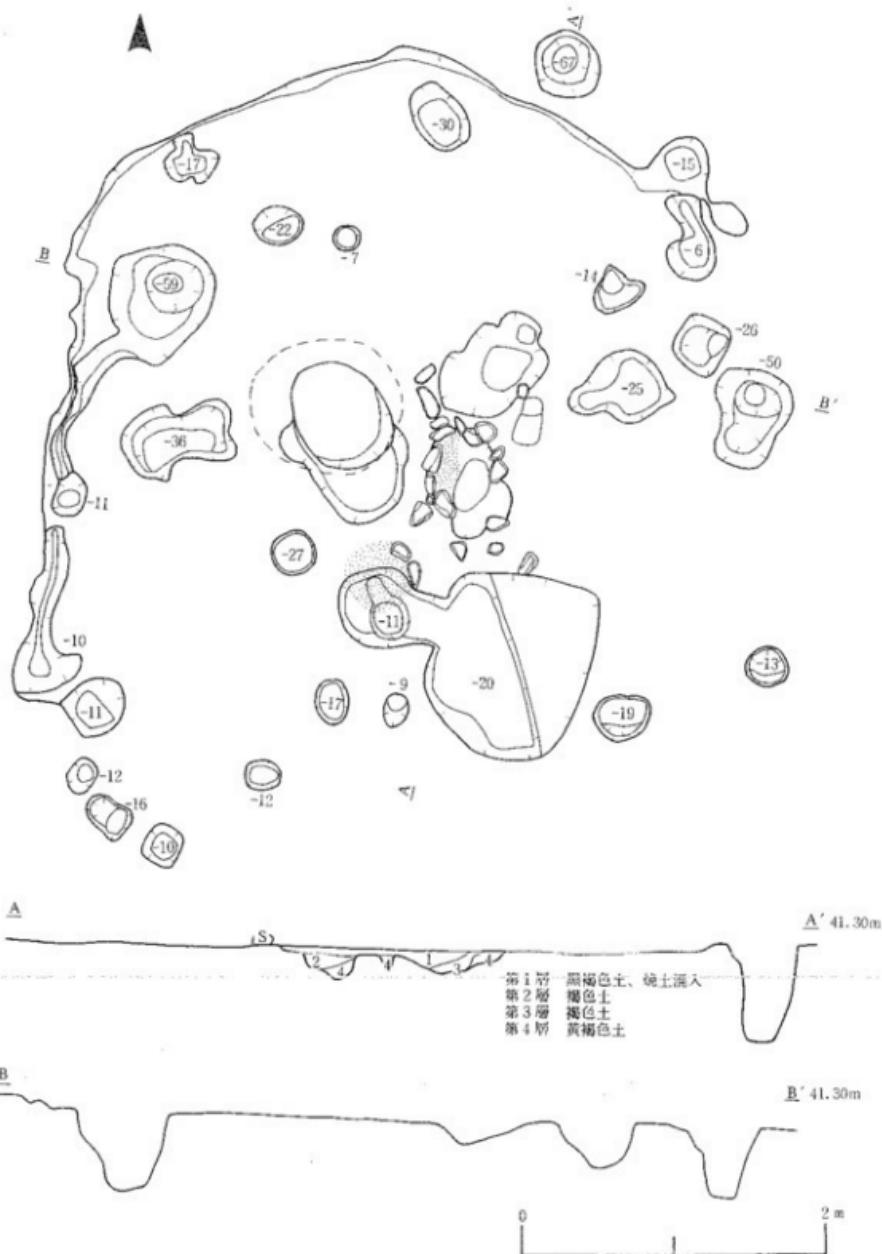
調査区東側で検出された。

プランは、東・南側は埋されて不明であるが、わずかに残存する北・西壁から推定すると長軸約5m、短軸約4.5mの横円形を呈するようである。ピットは多数検出されているが、やをとり囲むように存在する北側の深さ30cm以上のものが主柱穴の一部と考えられる。炉は石開い部と掘り込みからなる。掘り込み内は堅くしまっている。床面は軟弱である。

13号住居跡（第15図）

調査区中央西側で検出された。

プランは直径約2.7mの円形を呈する。確認面からの深さは約15cmで、壁はゆるやかに立ち上がる。ピットは7個検出されている。やをはさんで南北に位置する2個と西側の3個が主柱穴と考えられる。やは東側に作られており、焼土面と掘り込みがある。礫の抜き取り痕と考えられる。小さな痕跡が検出され、石組部の存在が考えられる。また焼上面の西側には埋設土器抜き取り穴が確認されている。床は平坦で、軟弱である。



第14図 12号住居跡

出土遺物

土器 (第22図60・61)

覆土から出土した。沈線と磨消しによる無文帶を施す土器である。

石器 (第22図16)

16は上部が欠損している石棒である。

竪穴状遺構 (第16図)

調査区中央西側で検出された。

プランは長軸約9.4m、短軸約3.3mの不整形を呈する。壁高は約12cmで、ややゆるやかに立ち上がる。覆土は黒色土、褐色土、暗褐色土を主体として堆積し、ブロック状をなすところもみられる。ピットは北東部および南側の壁下に検出されている。床面は平坦で良好であるが、やや軟弱である。

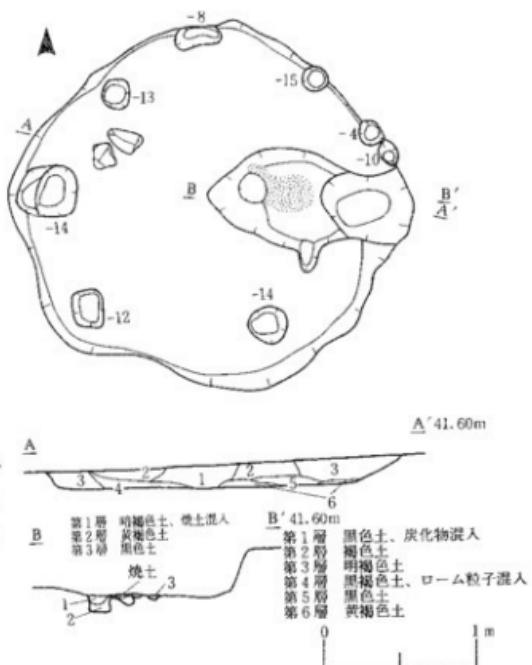
出土遺物

土器 (第23図62)

覆土から出土した沈線と磨消し無文帶で文様が施される土器である。

石器 (第29図17)

17は磨痕跡が認められる台石で、石皿または臼の用途が考えられる。



第15図 13号住跡

土 塚 一 覧 表

番 号	規 模 (m)			平 面 形	断 面 形	出 土 遺 物
	長 軸	短 軸	深 さ			
1号土塚	1.40	1.27	0.35	椭円形	鍋底状	
2号土塚	1.60	1.50	0.50	隅丸方形	鍋底状	
3号土塚	0.92	0.83	0.26	椭円形	鍋底状	
4号土塚	1.17	1.10	0.42	椭円形	鍋底状	
5号土塚	0.74	0.65	0.19	椭円形	鍋底状	
6号土塚	1.05	0.86	0.81	椭円形	フ拉斯コ状	
7号土塚	1.45	1.10	0.65	椭円形	袋状	第23図63~66
8号土塚	1.07	0.83	0.76	椭円形	袋状	
9号土塚	0.83	0.78	0.34	椭円形	鍋底状	
10号土塚	0.80		0.36	円形	鍋底状	
11号土塚	0.85		0.25	円形	鍋底状	
12号土塚	0.75		0.54	円形	ロート状	
13号土塚	0.72	0.60	0.82	椭円形	フ拉斯コ状	第23図67~68

土塚内出土遺物

7号土塚（第23図63~66）

覆土から出土した。63は深鉢形土器の口縁部破片である。口唇部、頸部に粘土紐を貼付し、その上に撫糸压痕文を施し、間に竹管状工具による刺突文が施されている。

13号土塚（第23図67~68）

覆土から出土した。67は細い粘土紐貼付により隣線文を施し、その内部に爪形文を充填させている。68は口縁部破片で、ヘラ状工具によって細い刻線を描いている。

炭焼窯跡（第32図）

調査区北東、沢の縁辺部で検出された。

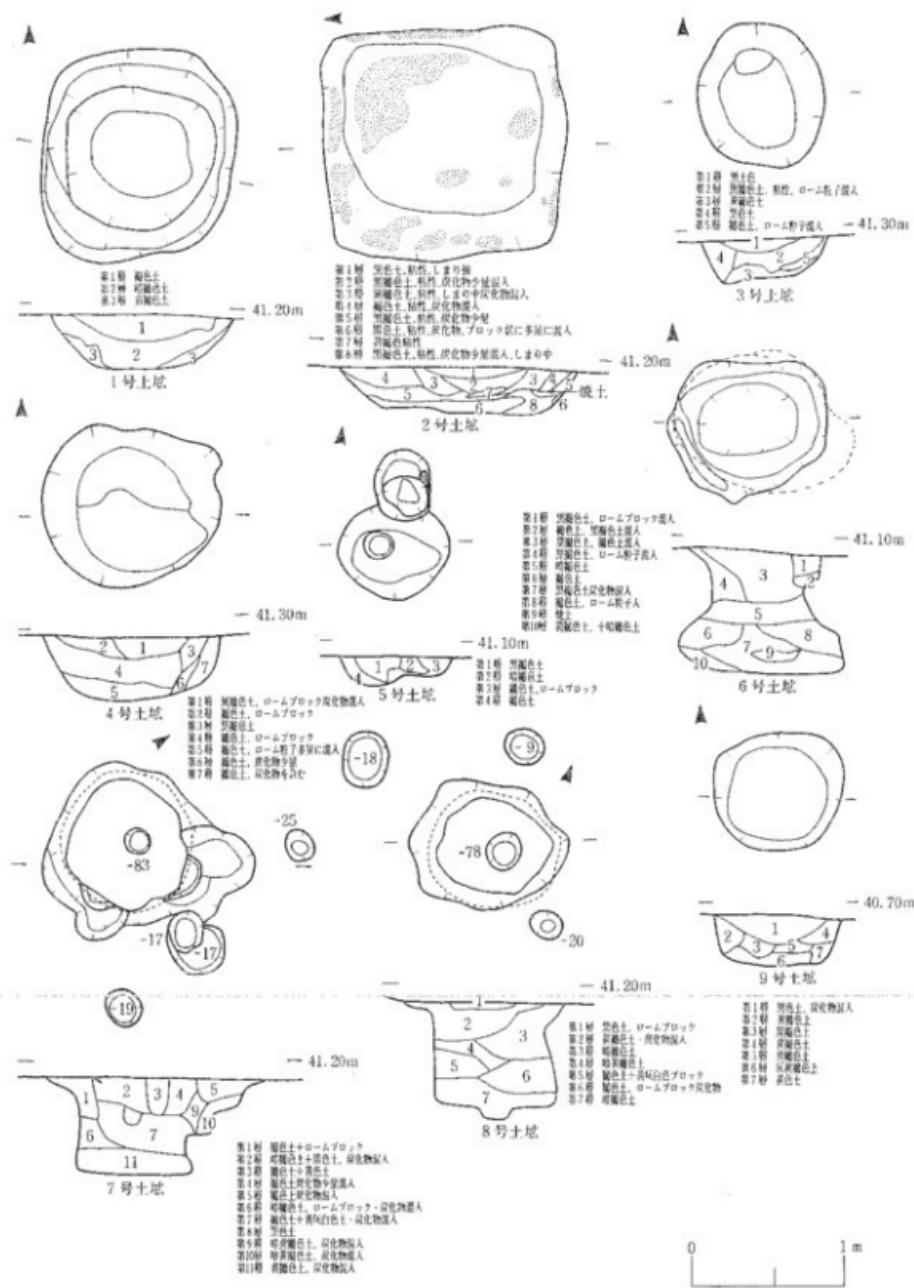
窯体は全長7.0m、最大幅2.45mを計る、半地下式である。煙出しは先端と左右両側にある。焼成部には幅約20cm、長さ15~130cmの炭化材が中軸線と直交する形で検出された。燃焼部には幅15~35cm、長さ2.65m、深さ5~10cmの溝が検出された。溝の周辺部からは湧水が認められ、排水溝と考えられる。燃焼部、前庭部には地山の礫が露出していた。周辺部には、この炭焼窯と関連する遺構の検出はされなかった。

出土土器

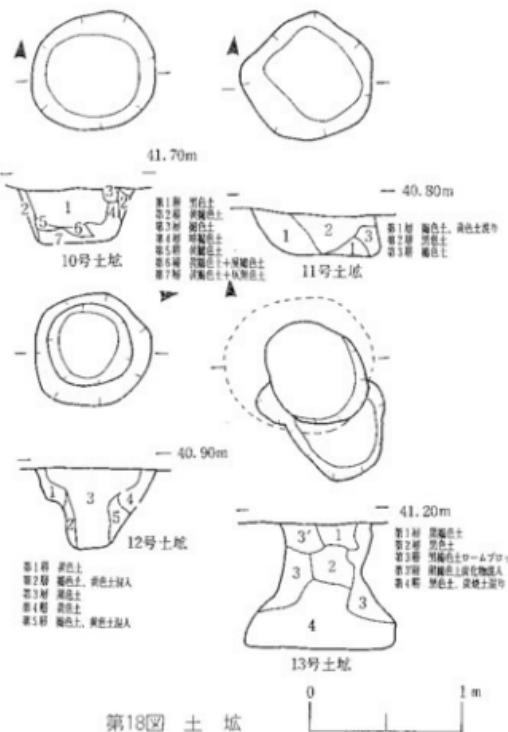
遺構内、遺構外出土の土器を文様から群に、器形から類に分けて述べてみたい。

1群土器（第19図4~5、第22図46~51、第24図69、第25図74~86）





第17図 土 塗



第18図 土 塚

粘土紐貼付による隆線文と撚糸圧痕文が主となる土器群である。

A-3類(4・74・78・84)：口縁部がゆるく外反する深鉢形土器である。74は波状口縁を呈する。78・84は撚糸圧痕が主体をなす。

A-4類(5)：口縁部がゆるく内湾し、キャリバー状を呈する深鉢形土器である。口縁、頸部に撚糸圧痕文をめぐらし、その間に粘土紐を山形に貼付し、両側に撚糸圧痕文、渦巻文を配している。

C-2類(69・85・86)：口縁部がゆるく内湾する浅鉢形土器である。細い粘土紐を貼付して隆線文を施し、橢円状に区画した内部に撚糸圧痕文、渦巻文を施す。

2群土器(第23図63・66・67、第25図87-101)

粘土紐貼付によって隆線文を配し、撚糸圧痕文、爪形文等によって文様が施される土器群である。

A-3類(63・67・87・94-99)：口縁部が外反する深鉢形土器である。87は細い粘土紐を葉脈状に貼付して、その内部に爪形文を充填している。94-99は口唇部、口縁部に粘土紐貼付で隆線文が施される。94-96はその上に撚糸圧痕文が施され、97-99はヘラ状工具により刻み目が施される。隆線に沿って撚糸圧痕による爪形文、ヘラ状工具による爪形文がみられる。

3群土器(第24図71、第26図102-104)

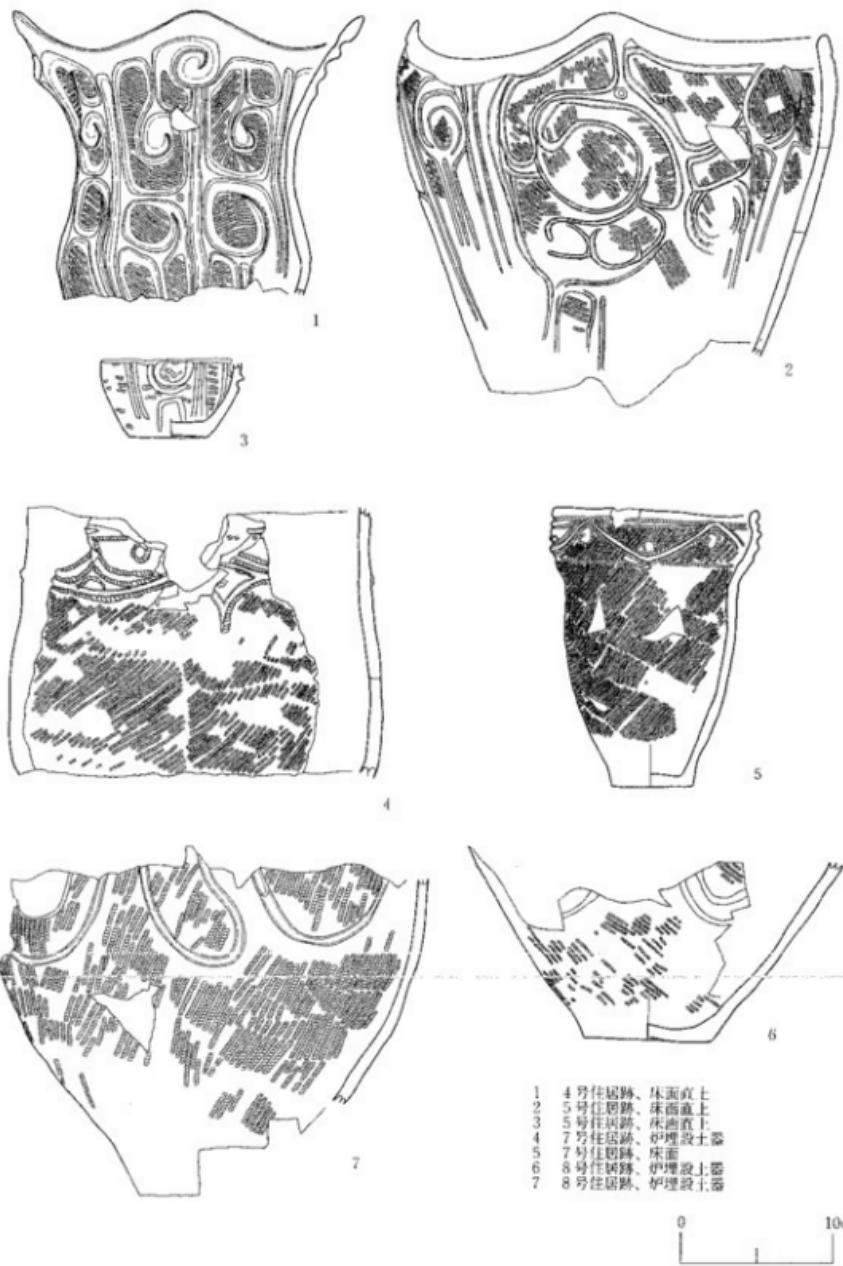
粘土紐貼付の隆線文によって渦巻文が施されるものである。

A-2類(71・102)：71は橢円文で区画した内部に刻み目を施している。102はゆるく口縁部が内湾する深鉢形土器である。ゆるい波状口縁の頂部に渦巻文がみられる。粘土紐貼付の隆線文によって連絡する渦巻文を展開させている。

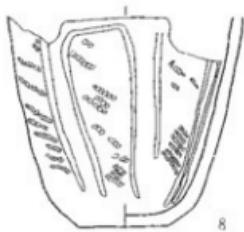
4群土器(第19図1、第26図105-109)

隆線によって渦巻文を展開させる土器群である。

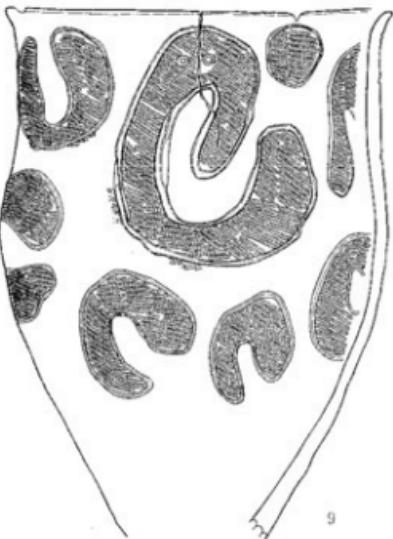
A-2類(105-109)：口縁部がゆるく内湾する深鉢形土器である。いずれも波状口縁をなすが、特に106・108は大型である。隆線による渦巻文が施され、105のように隆線間を磨消すものもある。



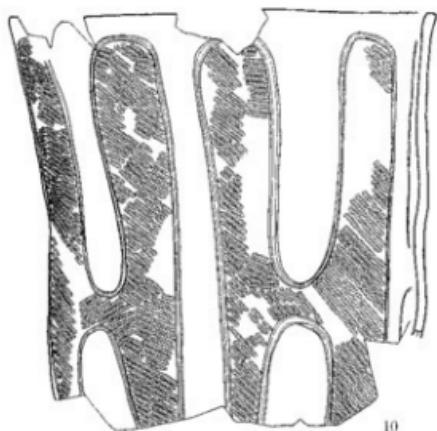
第19図 遊横内出土土器



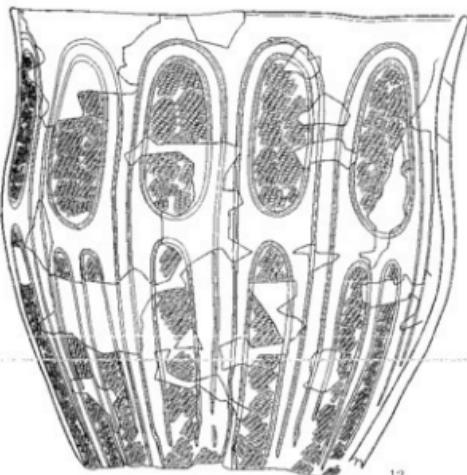
8



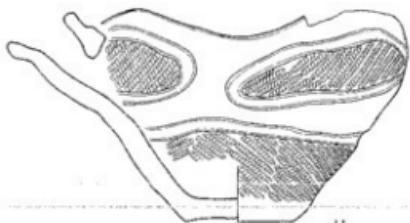
9



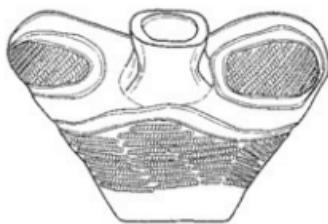
10



12



11



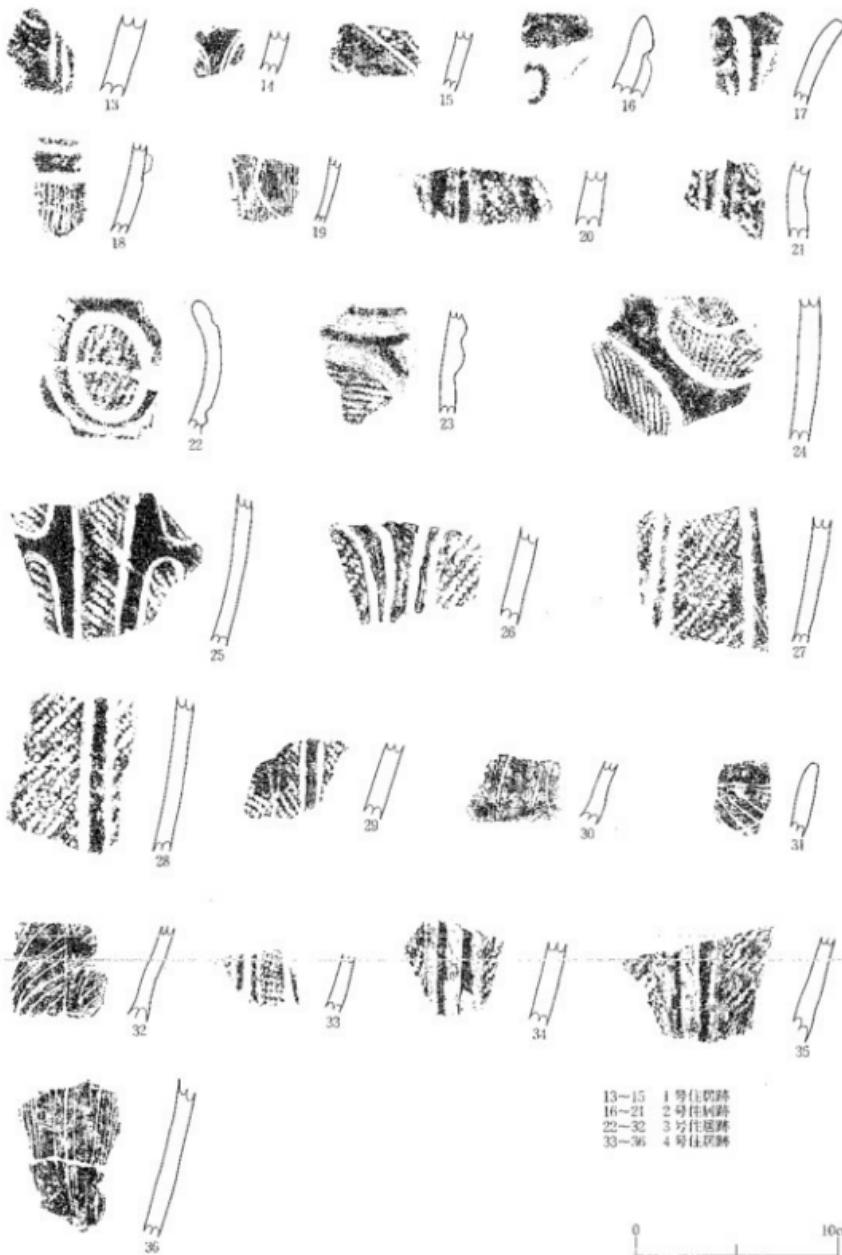
- 8 8号住居跡、力理設土器
9 8号住居跡、力理設土器
10 8号住居跡、床面
11 8号住居跡、覆土
12 9号住居跡、力理設土器

11は縮尺 $\frac{1}{2}$

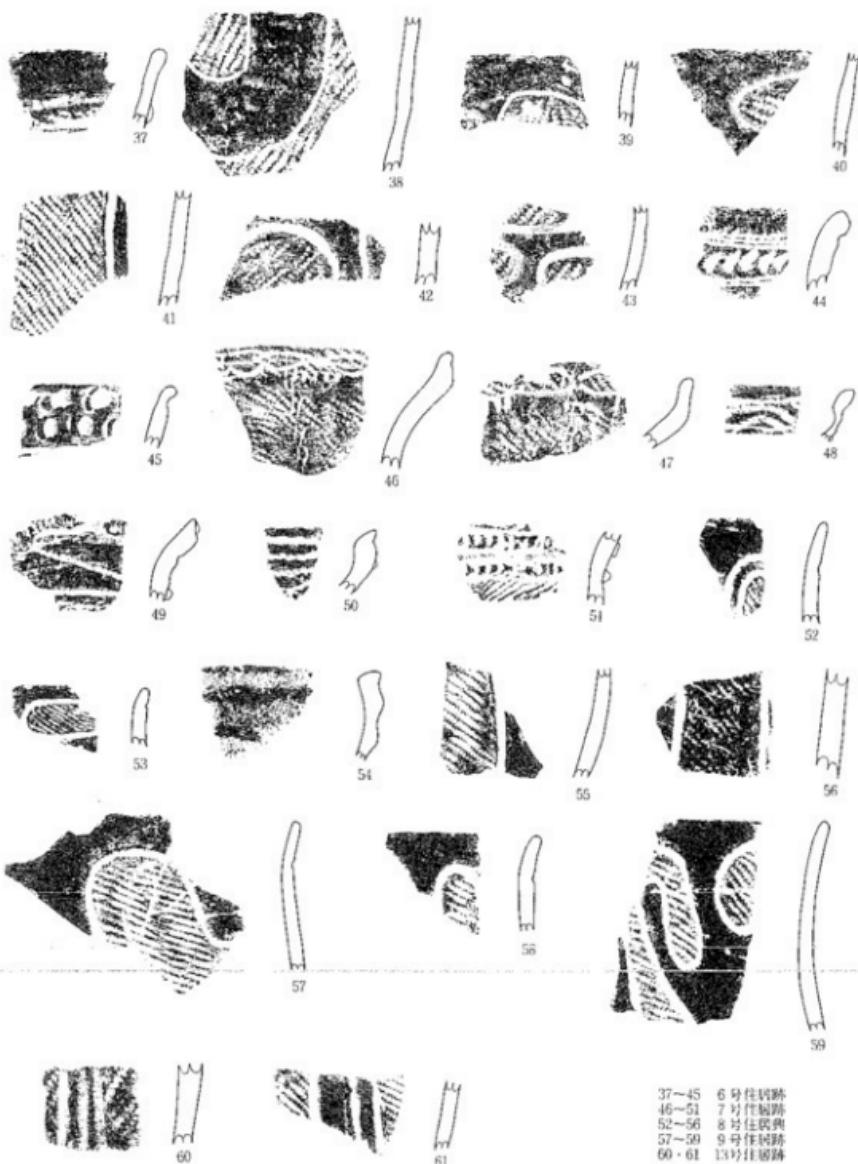
0

10cm

第20図 遺構内出土土器



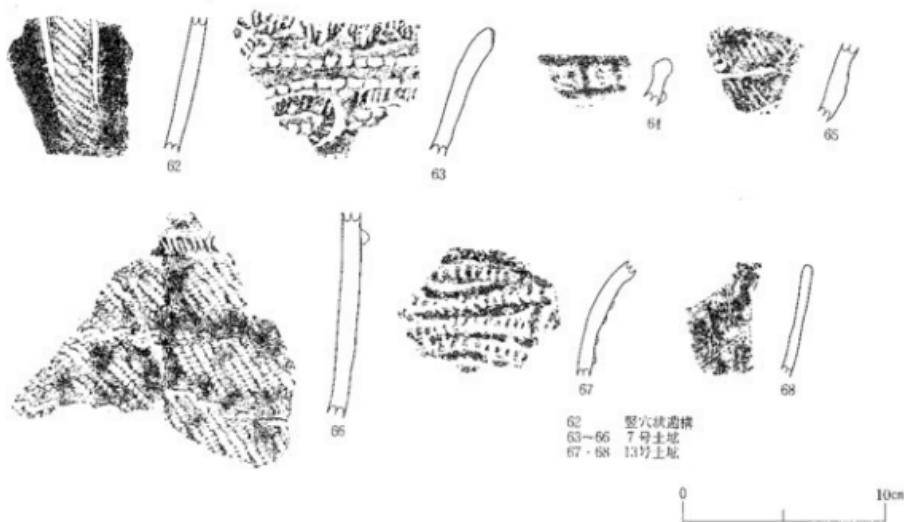
第21図 通構内出土土器



37~45 6号住居跡
46~51 7号住居跡
52~56 8号住居跡
57~59 9号住居跡
60~61 13号住居跡

0 10cm

第22図 遺構内出土土器



第23図 遺構内出土土器

A-3類(1)：口縁部が外反する深鉢形土器である。

5群土器（第21図25・26、第26図112～118）

沈線による懸垂文によって区画され、楕円文が施される。

A-2類(114・115)：口縁がゆるく内湾する深鉢形土器である。口縁に一条の沈線がめぐる。

6群土器（第20図8、第21図27～29、第22図60・61、第23図62）

沈線による懸垂文が施され、沈線間に幅の狭い磨消し帯を有する土器群である。

7群土器（第20図10・12、第21図22、第22図41、第24図73、第27図128～131）

沈線で懸垂文、楕円文が施され、沈線の使い方が曲線的になる。また磨消し帯が幅広く施されるようになる土器群である。

A-2類(73)：口縁部が内湾する深鉢形土器で楕円文、懸垂文で区画している。

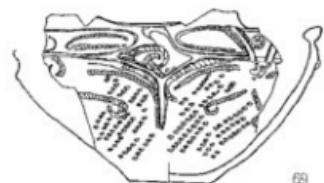
A-3類(10・12)：口縁部がゆるく外反する深鉢形土器である。10は懸垂文を連續させている。

12は懸垂文で区画した内部に楕円文、さらに懸垂文(△状)を施している。

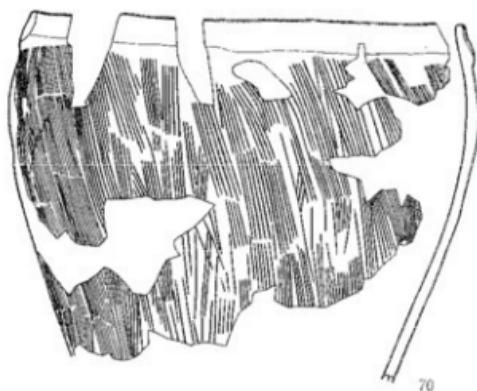
8群土器（第19図6・7、第20図9・11、第21図23・24・31・32、第22図37～42・54～59、第27図132～135）

沈線と磨消し手法を用い、曲線的に「J」、「C」状に文様を展開させる土器群である。

A-3類(99・37・54・5759・132)：99は口縁部が外反し、胴部が膨らむ深鉢形土器である。他はいずれも深鉢形土器の破片である。



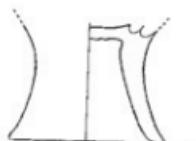
69



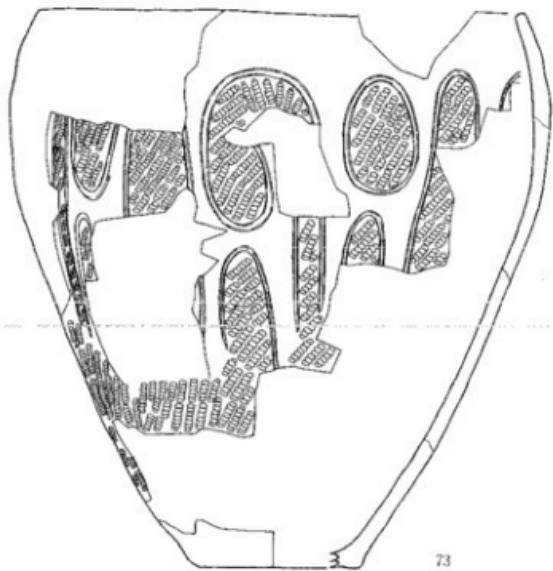
70



71



72



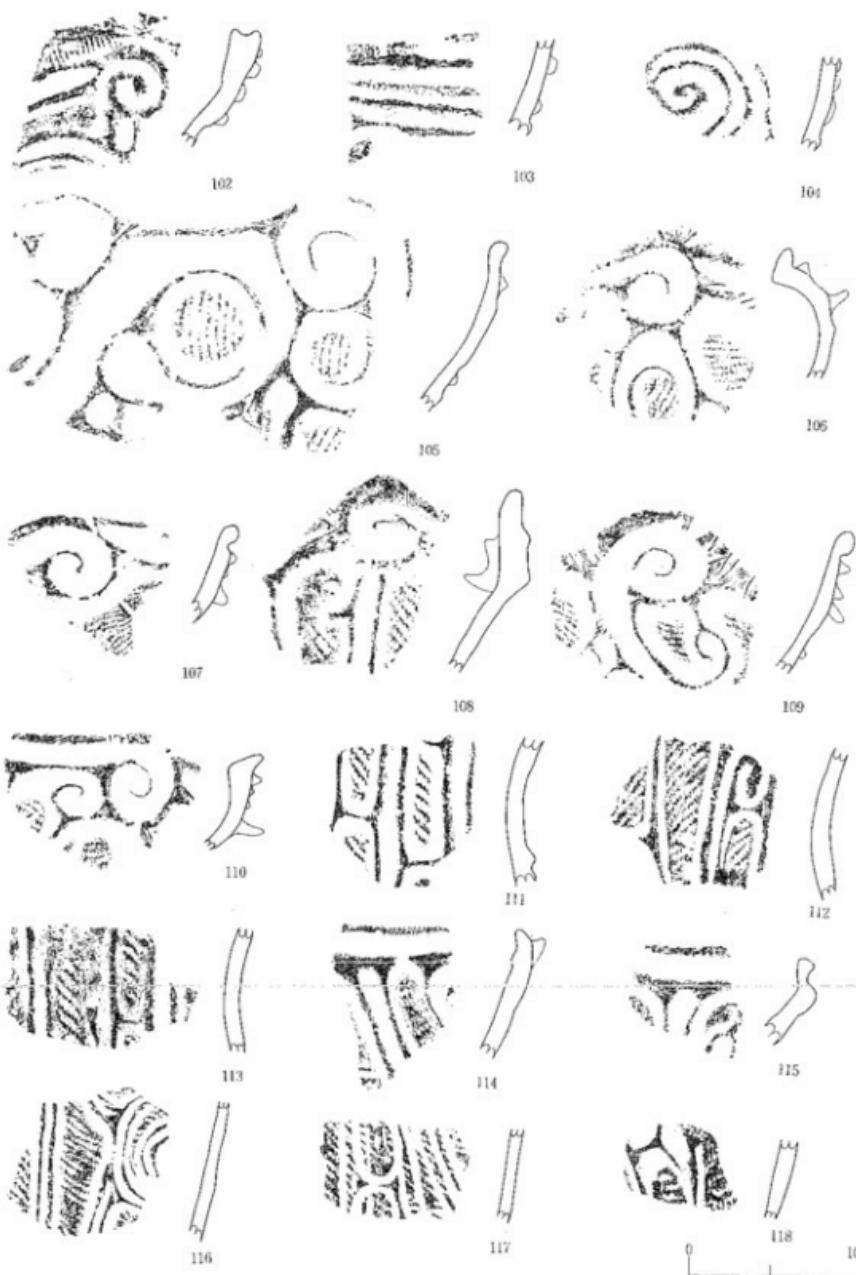
73



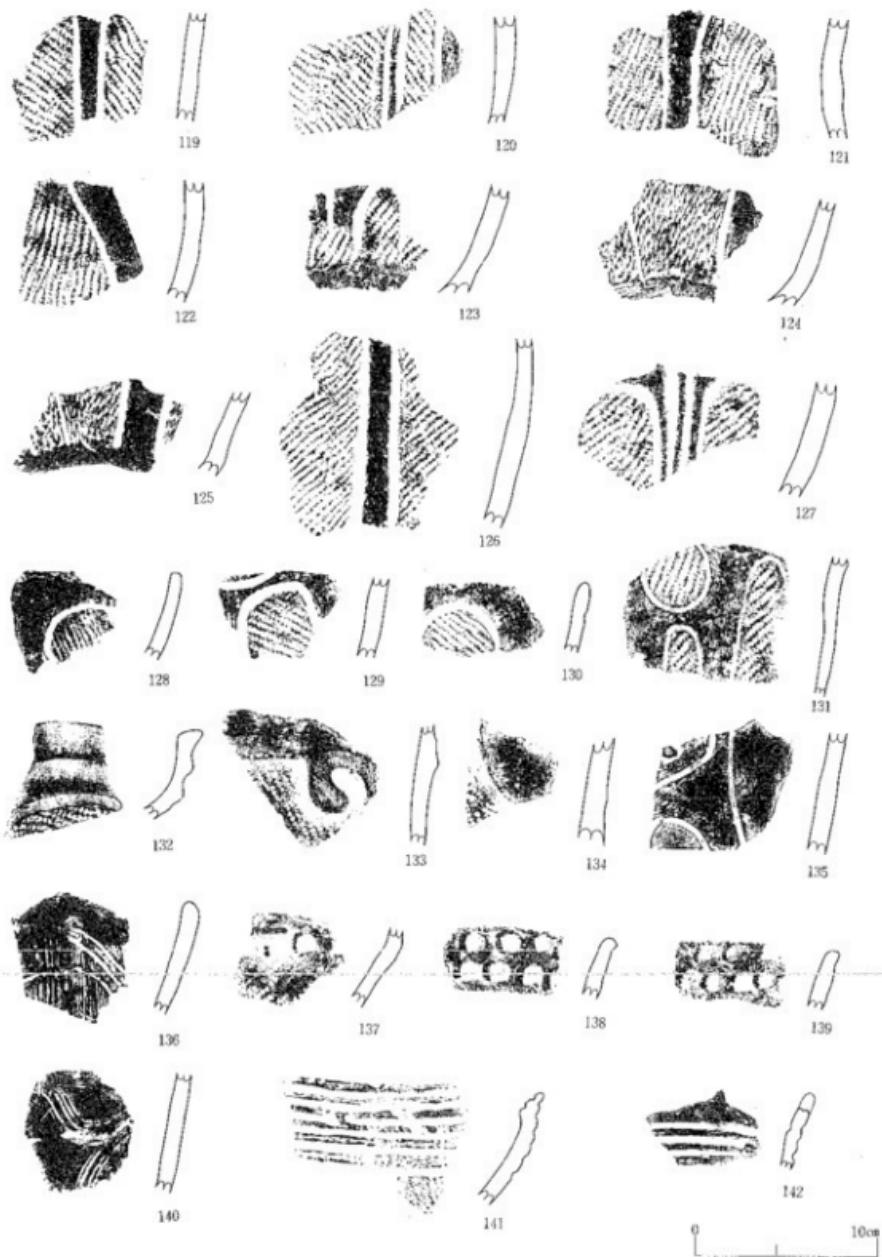
第24図 遺構外出土土器

第25圖 遺物出土于器





第26図 遺構外出土土器



第27図 遺構出土土器

』一類 (11)：注口土器である。口縁に梢円文が施され、体部には一条の沈線がめぐる。地文は梢円区画内はL Rの横回転、体部はL Rの縦回転の細文である。

9群土器 (第21図31・32、第27図136～140)

縄文時代後期初頭と思われる土器を一括した。細いヘラ状の工具で葉脈状、直線的に細い沈線を施すもの (31・32・136)、口縁部に指による刺突を加えるもの (137～139)、ヘラ状工具により流水状に沈線を施すもの (140) などがある。

10群土器 (第27図141・142)

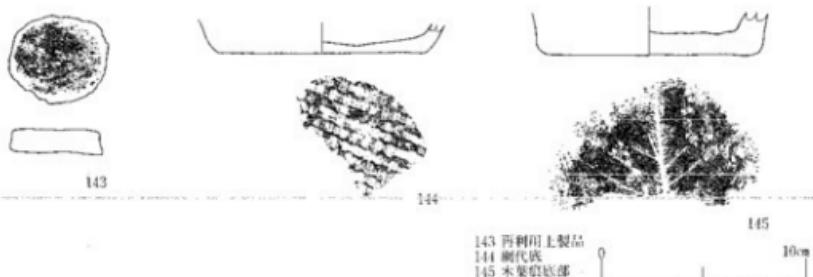
縄文時代晩期の土器を一括した。141は口縁内側に2条、外側に6条の平行沈線を施す。142は山形突起を有し、口唇部、口縁内側に沈線をめぐらし、口縁部には平行沈線と瘤状の突起で工字文が施される。

遺構外出土遺物

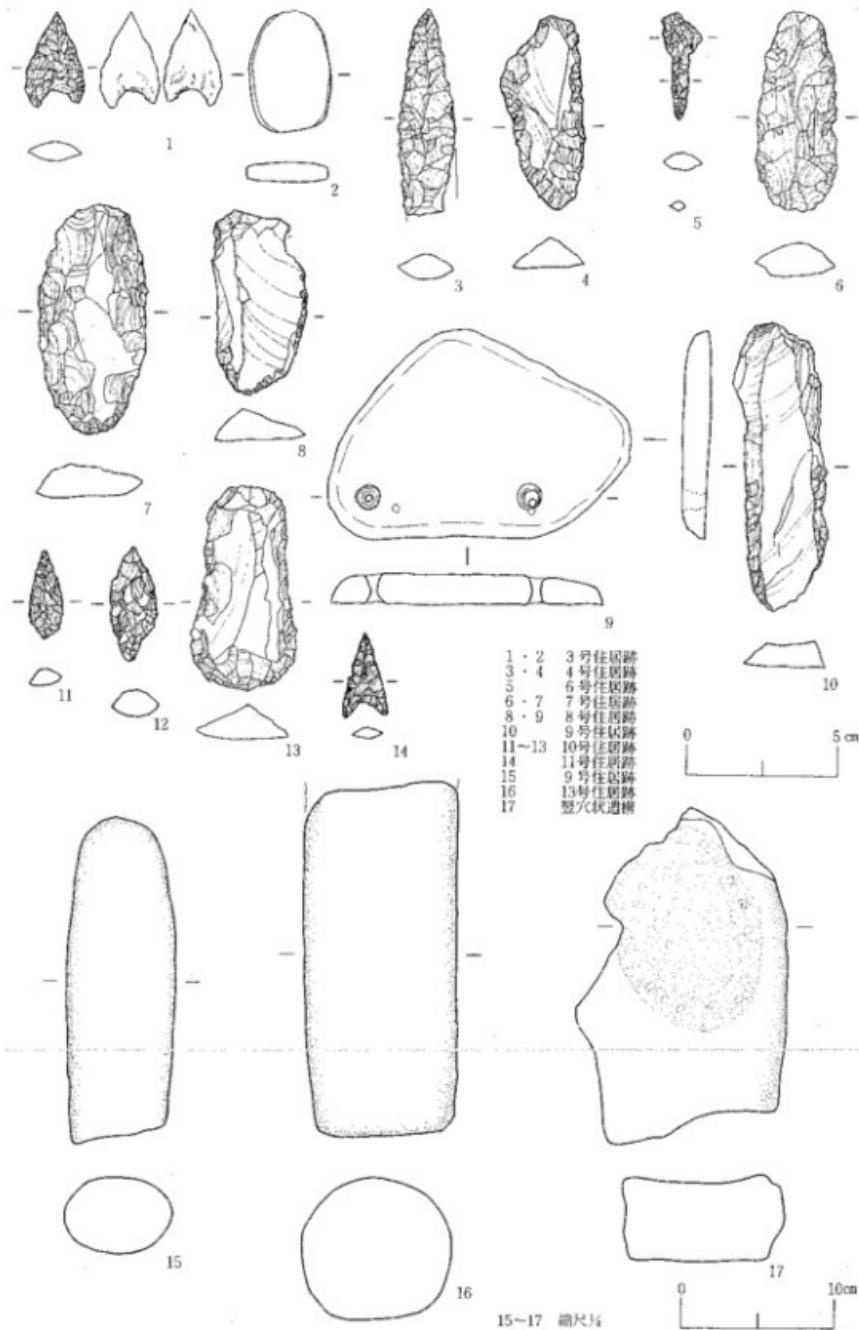
土製品 (第28図143)：再利用土製品 (円盤状土製品) である。上器片を利用したものである。

石器 (第30図18～35、第31図36・37、第31図40～51)

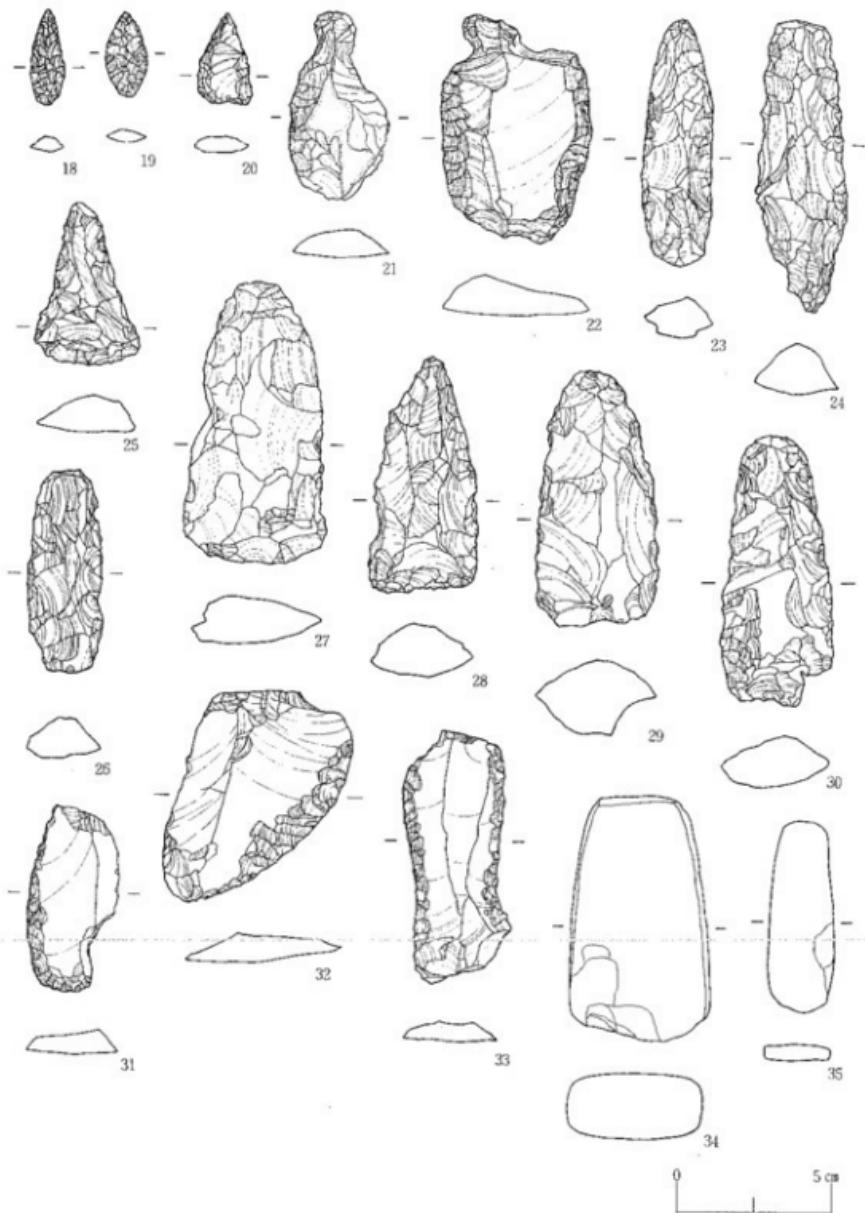
18・19は有茎、20は無茎の石鏃である。21・22は縦型の石匙である。23・24は槍先状石器である。25～30はヘラ状石器で、断面形がほとんど凸レンズ状である。刃部が側縁部、あるいは縁辺部にある。搔器あるいは削器としての用途が考えられる。33は両側縁部が加工された削器。34～37は磨製石斧で、37にはアスファルトの付着が認められる。38は磨製技術によって三角形に整形し、両面から孔を穿っている。装飾品と考えられる。39は軽石、40～42は石皿である。43～45・51はくぼみ石、47・48は磨石、46・49・50は敲石である。



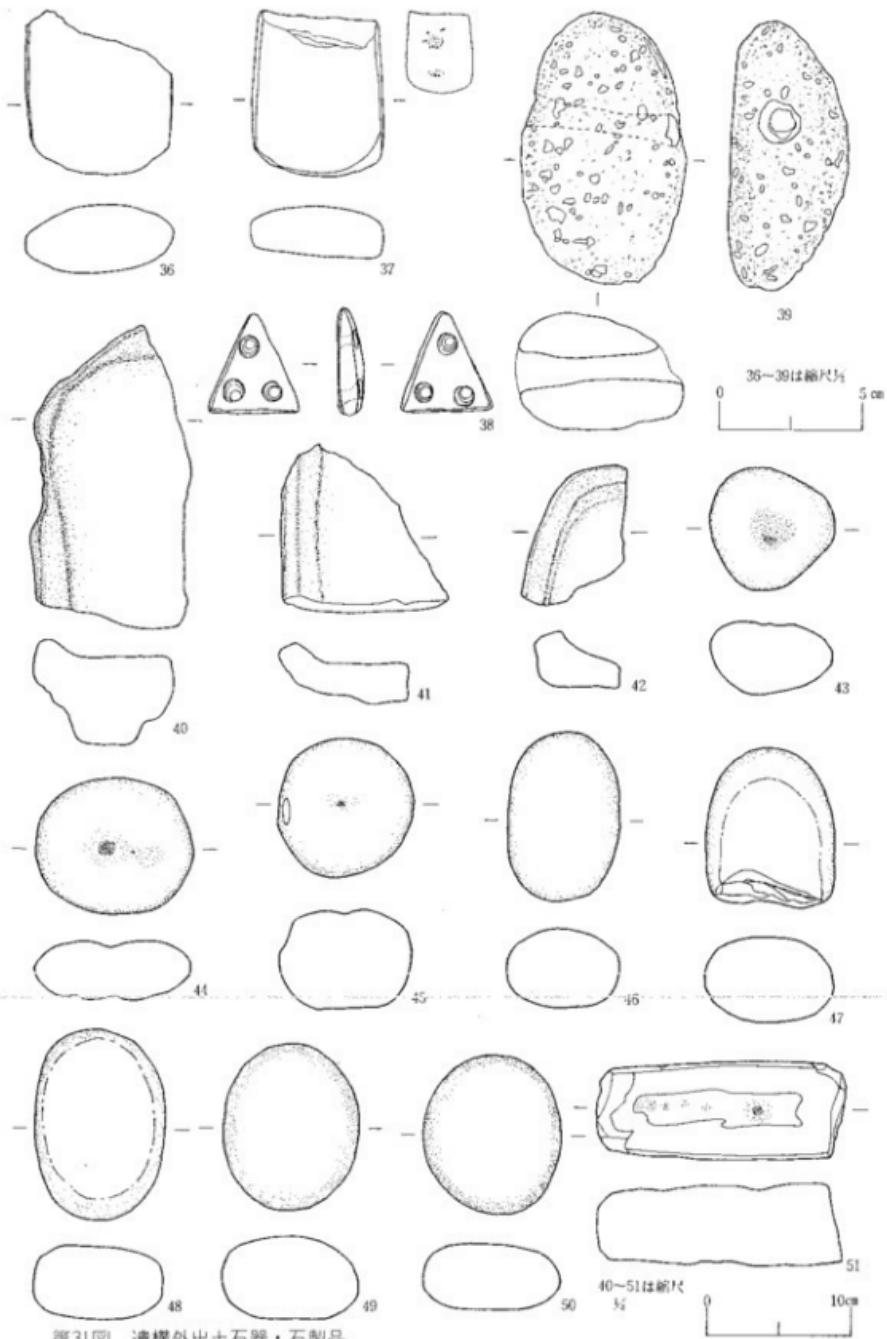
第28図 遺構外出土土器、土製品



第29図 遺構内出土石器・石製品



第30図 遺構外出土石器



第31図 遺構外出土石器・石製品

まとめ

住居跡について

本遺跡では、西から北東に入り込んでいる沢に向い、北側にゆるく傾斜する台地の縁辺部に沿って、東西に長く13軒の竪穴住居跡を検出した。

竪穴住居跡の時期については、が^レ埋設土器および床面出土の土器を年代決定の決め手とするならば3・4・9号住居跡は大木9式期、5号住居跡は後期初頭、6・8号住居跡は大木10式期、7号住居跡は大木7b式期に位置づけられる。また2・12号住居跡はが^レの形態から縄文時代中期後～末葉の時期が考えられる。他の1・10・11・13号住居跡は覆土出土遺物などから縄文時代中期のものと推測できる。これらを整理すると以下のようになる。

大木7b式期——7号住居跡

大木9式期——3・4・9号住居跡

大木10式期——6・8号住居跡

縄文中期後～末葉——2・12号住居跡

縄文中期——1・10・11・13号住居跡

縄文後期初頭——5号住居跡

のことから本遺跡は、縄文時代中期前半から後・末葉・後期初頭にかけての集落跡であり、一時期には最も多い大木9～10式期で2～3軒の住居の存在がうかがえる。

大木7b式期の住居跡は隅丸長方形のプランを呈する大規模なもののが^レ埴縁によって切られているが^レ、埋設土器の残存状態から、石開い上器埋設が^レと思われる。大木9・10式期、後期初頭？の住居跡は、円形、楕円形のプランを呈し、部分的に周溝のめぐるものもある(6・8号住居跡)。炉は石開いが^レと複式炉がある。石開い炉には埋設土器は認められない(1・3新、6新、11号住居跡)。複式炉をもつ住居跡は2～6・8・9・12号住居跡である。石開い土器埋設部+石組部+掘り込み部からなるものがいわゆる複式炉の典型的なものとするならば本遺跡でその条件を充たすものは6・8・9号住居跡である。2～5・12号住居跡は、石組と掘り込みは認められるが、石開い土器埋設部・掘り込み部はみられない。これらも複式炉の形態に入るものではあるが小形である。

3・6・8号住居跡の炉には作り替えが認められる。3号住居跡は複式炉から東に位置を移して石開い炉に、6号住居跡では複式炉を同位置で作り替え、さらにこの複式炉を埋めた後に石開い炉に変えている。都合3期である。8号住居跡ではそれ位置を変えて4時期の変遷が認められる。すべてに埋設土器があり、最も古い1期の上器は大木9式土器の新しいものである。また新しい4期の土器は大木10式土器であり、土器型式では1型式の差が認められる。このことから少なくとも4時期の炉にはかなりの時間差が考えられる。8号住居跡はが^レ埋設土器からみると大木9式期から大木10式期への移行期と考えることもでき興味深い。

出土土器について

本遺跡から出土した土器は、数にして整理用コンテナで10箱程である。実測図として載せたものはか壇設上器、床面、床直上から一括出土したものである。器形は主に深鉢形土器、鉢形土器、浅鉢形土器、壺形土器などがある。ここでは先にその施文様から群に、器形から類別したものの時期について考えてみたい。

1群土器は粘土紐貼付による隆線文と撚糸圧痕文が主体を占め大木7b式期と思われる。2群土器は細い粘土紐貼付によって区画し、区画内に爪形文、撚糸圧痕文を施すものや、また隆線上に撚糸圧痕文を施すものもある。円筒上層C式期と思われる。3群土器は、粘土紐貼付による渦巻文と隆線によって連絡させるもの、口縁部に梢円文、区画内に刻み、刺突を施すものなどがある。大木8b式期と思われる。4群土器は波状口縁をもつ土器が主体を占め、口縁部は隆線による渦巻文が展開する。渦巻文の下方はやはり隆線による懸垂文が施される。5群土器は主に沈線の懸垂文によって区画され、区画内に梢円文が施されている。6群上器は沈線の懸垂文間に幅の狭い磨消し帯を有する。7群土器は沈線によって懸垂文、梢円文がみられ、沈線が曲線的に、また磨消し帯が幅広く施される。以上述べた4~7群土器は大きく大木9式期に比定される土器であるが、3・4群土器はその中でも古手に入るものであろう。8群土器は、沈線と磨消し手法を用いて文様を横方向、曲線的に「J」「C」字状に展開させるものや、31・32は蔓脈状の文様を施すもので坂ノ上A遺跡AⅡ群4類七器、及び坂ノ上E遺跡5群6類土器と同様のものである。大木10式期に位置づけられる。9群土器は、縄文時代後期初頭と思われる土器を一括した。10群土器は縄文時代晚期の土器で、平行沈線と瘤状の突起をもち工字文を施している。大洞A式に比定できるものである。

参考文献

秋田市教育委員会：「小阿地下 墓 遺跡発掘調査報告書」 1976

秋田市教育委員会：「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」 下堤G遺跡、野畠遺跡、湯ノ沢B遺跡 1983

秋田市教育委員会：「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」 坂ノ上E遺跡、湯ノ沢A遺跡、湯ノ沢C遺跡、湯ノ沢D遺跡、湯ノ沢F遺跡、湯ノ沢H遺跡、野形遺跡 1984

秋田県教育委員会：「内村遺跡発掘調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第92集 1981

秋田県教育委員会：「梨ノ木塚遺跡発掘調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第63集 1979

鹿角市教育委員会：「天ノ森遺跡発掘調査報告書」 鹿角市文化財調査資料26 1984

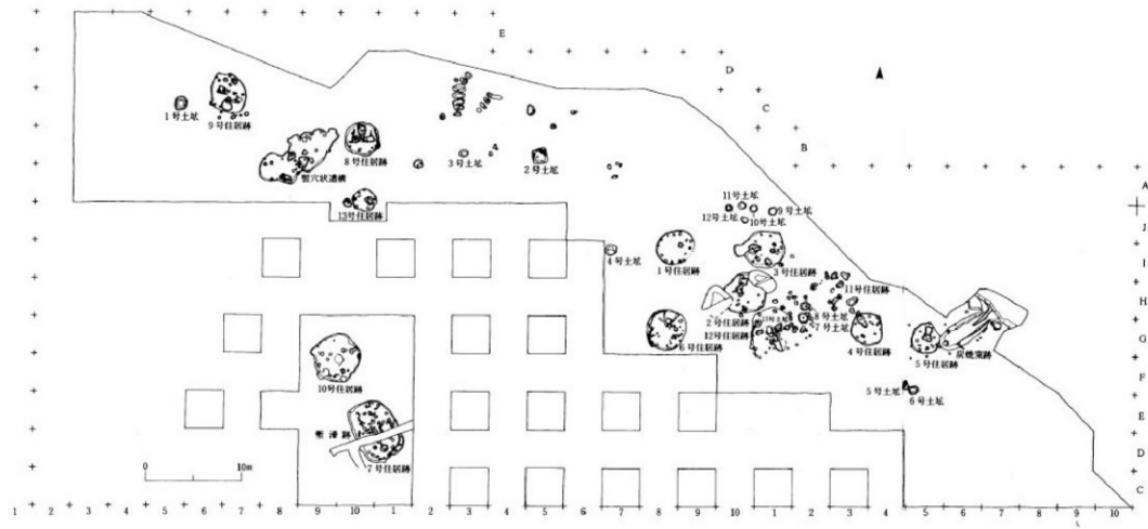
北上市教育委員会：「滝ノ沢遺跡」 北上市文化財調査報告第33集 1983

盛岡市教育委員会：「柿ノ木平遺跡」 昭和57年度発掘調査概報 1983

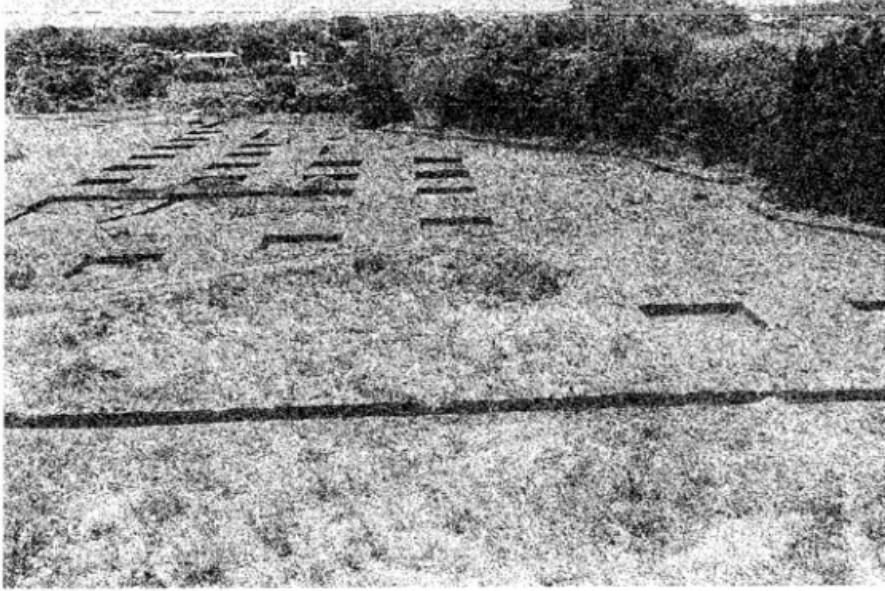
岩手県立博物館：「岩手の土器」 —県内出土資料の集成— 1982



第32図 地域実測



第33回 通構配置図



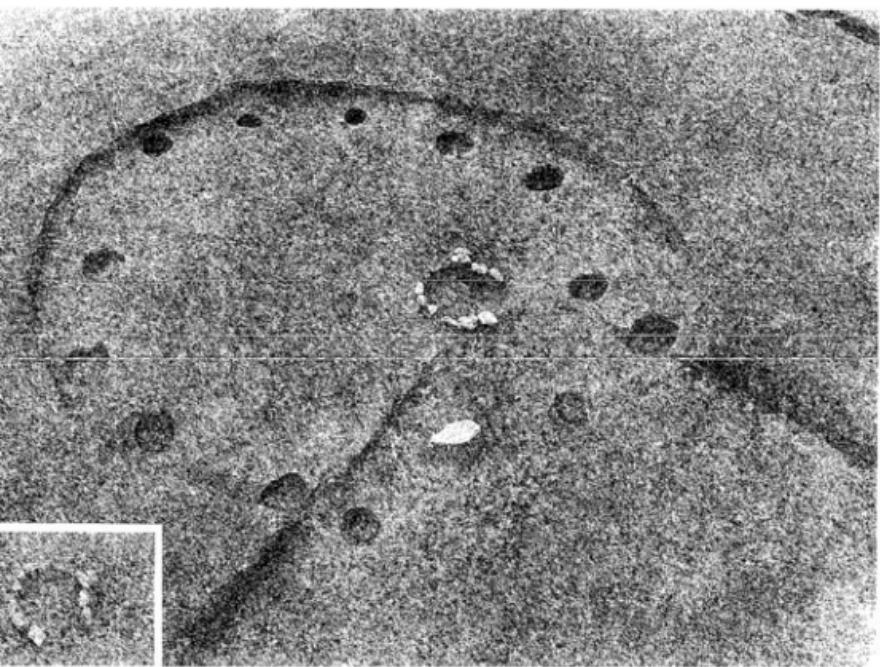
遺跡全景（西→）



遺跡全景（西→）



遺跡近景（北西→）



1号住居跡（南東→）